ジュエル！

asobito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジュエル！

【Ｎコード】
Ｎ５１６６Ｚ

【作者名】
ａｓｏｂｉｔｏ

【あらすじ】
オレの名前は一条（はじめ）初。下校途中外国人の美女が車に轢かれそうだったので助ける為道路に飛び出したとこまでは覚えてる。でも気が付けば赤ん坊に、しかもその美女が母親！？え？オレ人間じゃないの！？地球ではない異世界で新たな人生を歩むことになったハジメの物語。
素人の初めての執筆なので色々問題が出てくること必至ですが、完結できるよう頑張ろうと思います。誤字脱字その他気になったところがありましたら教えてもらえると助かります。

プロローグ

オレの名前は一条初(はじめ)。田舎町に暮らす普通の高校2年生。外見は中肉中背で顔は・・・まぁ中の下くらいなんじゃないかな。可もなく不可もなくって感じ。勉強も運動もそつなくこなすタイプ、飛び抜けてなにか才能があるわけでもないので友人からは「器用貧乏」とか言われたりもするが。まぁ「どこにでもいる普通の高校生」っていうのが一番わかりやすいか。趣味は映画鑑賞、ゲーム、友人達と旅行に行ったりするくらい。

両親はオレが中学の時に事故で他界。それから親戚の叔父さんの所に世話になってたけど高校に入って一人暮らしを始めた。叔父さん達に世話になりっぱなしも気が引けるというのが一番の理由かな。親の残してくれたお金があるけど将来の為にできるだけとっておきたいのでバイトをして生活の足しにしている。金銭的なこともあるし、高校卒業後はどこか就職するかなぁと大雑把な将来設計を考えてる。

そんな高校2年生の秋にその設計を根本からぶち壊す出来事が起きる。

「いや、マジでシャレにならん・・・。」

「まぁ自業自得ってやつだな。補習がんばれ。」

下校途中のオレの横でこの世の終わりみたいに顔を青くしているのは親友のサイトー。原因は先週やったテストが壊滅的で明後日から補習が盛り沢山になったことだ。周りがテストだ勉強だって言ってる時に連日徹夜でゲームしてクリアしたことを自慢してたバカにつける薬はない。まさに自業自得だ。

「はぁ、めんどくせー。ん？あ、そうだ今日新刊でるんだった。わりいちょっと待っててくれ！」

本屋の前を通り過ぎようとしたらそう言ってサイトーは本屋に駆け込んでいった。アイツがマンガ以外読んでるとこ見たことないしきっとマンガ買いに行ったな。ツッコミたい事はあるがいつものことなのでもう諦めている。また周りでアイツの勉強のフォローすることになんのかなぁと溜息を吐きつつ何気なく周りを見渡す。

「ん？外人か、あの人。」

横断歩道のど真ん中に金髪の美女が突っ立っていた。ちょっと離れている上にこちらからは横顔しか見えないが明らかに美女だ。服装は質素な白いシャツとグレーのロングスカートで着飾ってる感じじゃない。美女はまったく動こうとしない。

「あれ、まずくないか・・・。」

危ないことを知らせた方がいいかと歩き出すが、すぐに歩行者信号が点滅し赤になる。それでも美女は動かない。車道をみると車が交差点向かって走ってくるのが見える。スピードを下げるわけでもクラクションを鳴らすわけでもなく何事もないように交差点を通り抜けようとする。

「マジか！？くっそ、間に合うか！？」

全速力で横断歩道に向かう。車はすぐそこまで来ている。横断歩道に飛び込み美女をこちらに引き寄せようと手を伸ばすが空を切る。

「は？」

掴もうと伸ばした手が美女の体をすり抜けた。ありえない状況に思考が止まってしまう。

プァァァァァアアアアアア！！！

「初っ！！！」

車のクラクションとサイトーの声で我に返る。だが、車はもう目の前に来ていた。

「あっ・・・・。」

体に衝撃が伝わる瞬間目の前が真っ暗になった。

プロローグ（後書き）

はじめましてａｓｏｂｉｔｏです。
とりあえずプロローグはできたので投稿してみようと思います。続きも形になり次第という見切り発車もいいとこですが楽しんでくれる人がいたら幸い。

第1話　初の終わり　ハジメの始まり

暗闇の中フワフワと浮かんでいる感覚。体は全然動く気配がせず意識もボンヤリした状態。ただ心地の良い温もりに包まれている。

（オレたしか車に轢かれたんだっけ・・・。）

思い出そうとしても頭が働かない。

（轢かれた瞬間意識飛んだからよくわからんが、やっぱり重症なのかな。あーダメだなんか眠い・・。）

しばらくするとまた意識が戻り少しだけ考え事ができる。

（オレどれくらい入院するんだろ・・。1年くらい学校行けなかったりするのかな。そういやサイトーのやつ補習どうなったかな。あー、そんだけ休んだらオレ留年じゃないか？うわ、最悪だ・・。）

そんなことを考えているとまた激しい睡魔に襲われて再び眠る。

それからどれくらい経ったか、急に包んでいた温もりごと激しく体が揺さぶられる感覚に襲われた。どこかから声が聞こえる気がする。それも何人もの声。

（なにか聞こえるけどなにがおきてんだ。ん、なんか押し出される感じが・・・え、ちょっと誰だ引っ張ってるのはっ！？うおっ！！）

「さぁ！奥様！もうひと踏ん張りですよ！頭が見えてきました！！」

「がんばれ！もうひと踏ん張りだ！よし、なにかオレにできること

はないかっ！！」
「なにもありません！というかそこ邪魔です！！奥様を励ましてくださいっ！！」
「む！そうだな！そういうことならば全力で励ますことにしよう！！」
「～～～～～～～～～！！」

温もりから引きずり出され急に明るい場所に出された。あまりの眩しさから目がくらんでいたが次第に視界が広がっていく。目の前には４０くらいのおばさんがいた。首と腰あたりを支え持ち上げられると同時に歓喜の声を上げる。

「奥様！生まれました！男の子ですよ！！」

ここにきて初めて自分の状況を理解する。ありえないとしか言いようがないが自分が今生まれたばかりの赤ん坊だと気付いた。

（えええええええええええええええええっ！）

声に出そうと思っても出てくるのは鳴き声だけだった。赤ちゃん特融のあの泣き声。

「おお！元気な泣き声じゃないか！これは将来が楽しみだな！」
「旦那様は気が早すぎますよっ。さ、奥様お抱きになってください」

赤ちゃんを抱き満面の笑顔を向ける女性。優しさに満ち溢れている母親の顔を見て初はさらに驚愕する。その女性は横断歩道で立っていた金髪の美女だった。

（はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？）

もちろんこの声も鳴き声でしかない。周りから見れば元気に泣く生まれたての赤ちゃんだ。

「ふふ、私があなたのお母さんよ。これからよろしくねハジメ。」

そういってハジメの頬を指先でそっと撫でる。だが本人はあまりの驚愕にそれどころではなかった。しばらく泣いていたが、また睡魔に襲われ眠りにつく。それを大人たちは笑顔で見つめていた。

第1話　初の終わり　ハジメの始まり（後書き）

まとめてプロローグにすればよかった気がしないでもない。生まれてくる赤ちゃんがどういう感覚なのかは想像です。

第2話　0～3歳児の考察と衝撃の事実（前書き）

２０１１／１２／１９　家政婦の２人がさん付けだったので直しました。

第2話　0～3歳児の考察と衝撃の事実

驚愕の誕生から数週間。まだ身動きは取れるはずもなく小さなベッドの中でゴロゴロする日々を過ごす。生まれた時より物事を考えられるがすぐに眠くなってしまうのは脳がまだ発達してないからだろう。いわゆる食っちゃ寝生活だがとりあえず現状を把握するべく小さな脳をフル活動させる。

（まず現状としては、オレは今赤ん坊だ。ってことはあの事故でオレは助からなかったってことなんだろうか。でもなんであの女の人が無事な上にオレの母親なんだ・・・さっぱりわからん。それにここはどこなんだ。洋風な家の作りみたいだし、あの両親もどう見ても外人だよな。ここって外国なのだろうか。）

そんなことを考えながら周りを見渡す。木造建築の素朴な部屋。今寝ているベッドは木製だし近くに置いてあるおもちゃも木と布しか使われてない。がんばってベッドの端まで行って床を覗き込んだが木の板を並べただけ床だった。ここまで徹底した木造建築は田舎町に住んでいたハジメにも珍しいものだった。

（まったくコンクリートとか使ってないのか。どんだけ田舎なんだここ・・・。）

かなり年季のかかった感じのする家だが決して汚いわけではない。家政婦の人が毎日掃除しに来ているのを確認済みだった。家政婦の一人で10代くらいのかわいらしい女性が掃除の合間にやたらとハジメの所にきてかわいいかわいいと頬や頭を触ってきた。初めは嬉しかったりしたが、さすがに部屋の掃除中10分間隔くらいで来るのはストレスが溜まりそうだった。3日目に他の家政婦に見つかっ

て怒られていたのでストレスが溜まることはなかった。

（家の事はこれ以上わかんらんな。もうちょっと成長して歩けるようにならないと・・・。）

そんなことを考えていると部屋に女性が入ってきた。

「あら、ハジメまた動き回ったのね。まだ数週間でこれだけ動き回るなんて大きくなったらわんぱくな子になっちゃうのかしら。」

そう言いながら顔を覗き込みそっと頬をなでる。生まれた時から変わらない優しさに溢れた笑みを浮かべハジメを見つめる。

（名前はクラウさん・・だっけか。自分の母親にさん付けもどうなんだろう。）

身長は１７０ｃｍくらい。髪は金髪で細身の体だが出るところは出ているモデルのようなスタイルだった。顔も整っておりじっと見つめる黒い目が意志の強さを物語っている。まさに美人と言って何の問題もないだろう。母親とはいえそんな外人モデルのような人が至近距離で笑顔を浮かべ顔をなでてくるのだからハジメは内心落ち着かない状態だった。

（自分の母親に緊張してどうするオレ！）

赤ちゃんなのに緊張で固まっていたが、抱きかかえられて子守唄（まったく知らない歌）を聴かせられたハジメは速攻で眠りについた。

「やあ！只今帰ったよ！」

爽やかな大声にふと目を覚ますとすぐにドアを開けて父親が入ってきた。名前はオルタス。身長は１８０ｃｍくらい、サッパリ整えた短めの髪で色は目と同じく黒。掘りも深くキリッとした男前だった。体格は細身だが筋肉がしっかりついていて細マッチョという感じだった。ハジメを確認するとサッと抱き上げクルクル回りだす。赤ちゃんのハジメには若干早すぎたので恐怖の為に体を強張らす。だがオルタスは嬉しくて仕方がないのかそのままジャンプまでしようとする。

「さぁ高い高いもセットだ！今なら低い低いもセットで高低差が倍だぞー！」

そう言って回転を維持しつつしゃがんだ状態から立ち上がって頭上まで持ち上げようとするオルタスの肩に後ろから手が掛りピタっと動きが止まる。

「アナタ、なにをやってるんですか？」

「あ、クラウ、ちょっとハジメを楽しませよ・・う・と。」

振り返ったオルタスがピタリと止まる。ハジメからはクラウの姿は見えないが明らかにオルタスが動揺しているのがわかる。すぐにハジメをベッドに戻し反省を口にする。

「すまない。ハジメの顔を見たらうれしくなってつい張り切ってしまった。」

「まぁ気持ちはわからないではないですが・・・。まだ赤ちゃんなのですから気を付けてもらわないと困ります。」
「そ、そうだな。まだ早かったな。」
（あ、いつかやるんですね・・・。）

あのテンションの上がりっぷりからその日がそう遠くないと不安に駆られるハジメだった。

それからしばらく過ごすと母のクラウに抱かれ、部屋の外出ることも多くなった。そうなると両親以外も家の中に数人いることがわかる。父と母の身の回りのことをしている男性。名前はラウスペムス。両親はラウって呼んでる。オールバックにした白髪に細面、細く鋭い目で色は黒。眉は白で口と顎には白い髭。一見年寄にも見えるが４０歳くらいだろう。服装はまさに執事。言葉使いも丁寧で立ち振る舞い、仕事っぷりも含め（赤ちゃん目線だが）絵に描いたような執事だった。

次に家政婦２人。ふくよかな女性の方が名前をモルヒラ。ハジメが生まれるときに産婆をしていたのも彼女だ。もう一人がヒルエ。見た目は１０代前半、小柄でまだ少女の幼さが残っている。２人は親子で髪と目は茶色、モルヒラは髪を団子状に纏めていて、ヒルエは後ろに束ねている。身長は２人とも１６０ｃｍ前後というところだろう。モルヒラが主に仕事をしていてヒルエはそのサポートをする見習いのようなものだった。家族３人に対して執事と家政婦２人とはどういうことなのだろうと気になったが言葉を喋れないので当分保留することになった。

家には庭もありテラスもあったのでそこで外の景色を楽しめた。見渡す限り森だったが。そして庭先にありえないものを見つける。馬車だった。しかも引いてる馬が見たこともない馬だった。全身が黒っぽく目が赤く、鬣が風もないのにゆらゆら揺らめいていた。火が燃えてるように。ここでハジメは自分の置かれた状況に確信を持つ。

（これは・・・地球じゃないな。地球上の生物すべて知っている訳じゃないが、鬣が黒く燃えてる馬なんて存在しないのはわかる！）

馬を凝視するハジメを見て「お馬さんかっこいいねー」とクラウは嬉しそうに頭を撫でた。

３歳になり今では自分で立って歩けるようになった。高校生だった初の頃の感覚で歩こうとするとすぐ転んでしまうのでゆっくり歩くようにする。本人は慎重に歩いているようでもフラフラしている様に大人には見えるので後ろにはいつもクラウか家政婦が付くようにしていた。喋ることも問題なさそうだが、普通の子供は何歳から喋るようになるのかをよく知らなかったので大人達が話しかけてくるのを片言で返事するところから始めてみた。両親を騙しているようで少し罪悪感を感じたが、いきなりペラペラ喋りだす子供にいい印象はないだろう。最初に言葉を発した時は両親が大喜びで父から＞高い高いデラックス＜（ハジメ命名）を１０回連続でされた。この頃には何度も受けて耐性も付いたので最初ほど恐怖はないが、年々回数が増えジャンプの高さも上がっているのでどうにかしないといけないなと新たな問題に悩んでいた。両親以外も言葉を覚えさせる意味合いでよく話しかけるようになった。

ラウ（自分の事をラウと呼ぶように言っていた）は両親を「父上」「母上」と呼ぶ事や家にある色々な物の名前を教えてくれた。あと何もないところからカップやスプーンやお菓子を出すマジックを見せたりしてくれて楽しませてくれる。モルヒラは子供の扱いには慣れていたので小さい子供をあやす典型的なおばさんスタイルでさすがに高校生にそれはないだろと思う事でも見た目3歳児のハジメは嬉しそうにキャッキャ言うしかなかった。ヒルエは下にまだ幼い弟妹がいるのでその感覚で接してくれた。一緒に庭に出て花や木を見たり一緒に遊んでくれたりした。

見たり聞いたりする事が増えたおかげでさらに色々な事がわかってきた。この家の周りは森になっているがすぐ近くに村がある事。モルヒラとヒルエもこの村で暮らしている。村自体にはもう何度か行ったこともあった。両親に連れられて散歩がてら村を見て回ったりしたからだ。石や木で作られた家が8軒ほど井戸を中心に並んでいた。ニワトリが放し飼いにされていたり牛がつながれていたりしていたがどの生き物も微妙にハジメの知っているものとは違っていた。人々が着ている服は質素でアクセサリーやオシャレとは無縁という感じだった。そして何より驚いたのが住んでいる村人だった。普通の人間の他にトカゲのような顔をした人や耳のとがった人、犬の顔をした人、髪や目の色も多種多様だった。ハジメは過去に見た映画やゲームの世界観を思い出した。多少の誤差もあるがあのフィクションの世界が目の前に広がっていた。

（ここはファンタジーな世界なんだな・・・。生活も映画で見た中世とかそんな感じだしな。）

村人はみな楽しそうに生活していてクラウとハジメが通るの見かけるとお辞儀したり、ハジメに笑顔で手を振ってくれた。ハジメもそれに手を振って応えた。

あと驚いたのは父オルタスがここの村長だということだった。それはオルタスと来たときに村人がオルタスを「村長」や「村長様」と呼んでいたからわかった事だった。つまりクラウは村長夫人、ハジメは村長の1人息子ということになる。村人が楽しそうに暮らしているので父は優秀な村長なのだろう。ハジメは改めて父を尊敬するようになった。

家で母と過ごしている時にずっと気になっている事を思い切って聞いてみる事にした。生まれた時から気になっていた事。3歳でそんなこと聞いて大丈夫か不安だったが片言で聞いてみる。

「なんで、なまえ、ハジメ？」

「ん？なんでハジメって名前になったか知りたい？」

クラウは微笑みながら首を傾げる。ハジメはコクコクと頷く。

「ある日ね、急にどこかからラッパの様な音が聞こえてきたの。それと同時にハジメ！って声が響いてきたのね。でも周りには誰も見当たらないしおかしいなぁと思ってたのね。でも次の日お腹に赤ちゃんがいる事がわかって、あぁあれは神様の声だったんだって思ったの。だから生まれた子の名前はハジメにしようと思ったのよ。」

その説明を聞いてハジメは目が点になり思考が止まってしまった。

（ラッパの音ってもしかしてクラクションか？ってことはハジメ！って声はサイトーか・・・。）

「ん～ハジメには難しかったかなぁ？」

キョトンとしているハジメの頭を撫でて少し困った顔をするクラウ。それにハジメは苦笑いをするしかなかった。バカな親友が名付け親な上に神様になってる事に対してだったが。

第2話　0～3歳児の考察と衝撃の事実（後書き）

ハジメ、大地に立つ。
3歳児までに知った自分の周りの事と思わぬ名前の由来。色々設定がザックリなのはご愛嬌ということで。もっと正確に伝わりやすくすることが課題ですね。がんばりましょうオレ。

第3話　5歳児が聴く自分の種族について（前書き）

２０１１／１２／１９　家政婦の２人がさん付けだったので直しました。

第3話　5歳児が聴く自分の種族について

「ハジメ坊ちゃん、朝食の準備できましたよ。起きてください。」
「ん・・・は～～い・・・・。」
「ほら、そう言って起きる気０じゃないですか！ちゃんと起きてください！」

家政婦のヒルエに上半身を起こされやっと目を開ける。眠りを貪りたいと訴える体を無理やり動かしフラフラ立ち上がるのを確認してヒルエさんは部屋を出て行く。

「ふぁ～～～～・・・ねむ・・・。」

ヨロヨロしながらもタンスに向かい寝間着から普段着へと着替える。茶色のズボンに白いシャツと紺色のベスト、革のブーツを履いて壁に掛けてある鏡で身だしなみをチェックする。黒い髪、目は黒だが光に当った時よく見ると紫色になっているので限りなく黒に近い濃い紫なのだろう。これは父も母もそうだった。じっくり見ないと気付かないが。

顔立ちはさすがあの両親の息子という整った顔立ちでまだ5歳だが将来はイケメンになるのだろうなとハジメは考えていた。ここにサイトー（過去に好きだった娘がイケメンと付き合っていた事がありアンチイケメンになった前世の親友）がいたら「イケメンマジ死ねっ！」と掴み掛ってきただろうなとニヤニヤしている自分の顔に気付きすぐに元に戻して部屋を出て食卓のあるリビングへ向かう。

「おはようございます。」
「やぁハジメおはよう！」

「おはようハジメ。」
「おはようございます坊ちゃん。」
「おはようございます。朝食は用意できてるんで顔洗ってきてくださいまし。」
「おはようございますハジメ坊ちゃん」

ドアを開けて挨拶すると父、母、ラウ、モルヒラ、ヒルエと挨拶が帰ってくる。モルヒラに促されるままリビングを抜け隣のキッチンに入り外の井戸に向かう。丁度裏庭にあたる場所にある井戸で顔を洗いすぐ近くの馬小屋から顔を出す黒い馬に声を掛ける。

「クロ、おはよう。」
「ヒヒンッ」

鬣が火のように揺らめいている黒い馬は名前をクロフレイアと父から教えてもらったがクロと呼んでいる。クロが嬉しそうに挨拶してくるのを確認して家の中へ戻る。テーブルには朝食が準備されラウがハジメの席のイスを引き座らせるとラウと家政婦の2人も席に着く。食事は皆でするのは昔からのルールらしい。ラウに聞いたところ世間的には家政婦や執事が一緒に食事するのは珍しい事らしい。日本の一般家庭しか経験のないハジメにとってはむしろこちらの方が普通だったのでなんの違和感も感じなかった。

食事を終え片づける為に家政婦の2人やラウが席を立ち、ハジメも席を立とうとするとオルタスが話しかけてきた。

「ハジメ、今から大事な話があるから聞いてくれるか？」
「え、あ、はい、わかりました父上。」

浮かせた腰を下ろしオルタスを見る。オルタスの隣に座るクラウもこちらを見つめている。何があるのだろうと考えているとオルタスが再び話し出した。

「ハジメも5歳になったわけだし、色々話しておかなきゃいけないこともあってね。もちろん今すぐ全部理解しなきゃいけないわけじゃない。わからなかった事はその都度詳しく教えるからいつでも聞いてくれて構わないからね。」
「はい。」
「よし、それじゃまずは・・・オレ達の事から話そうかな。まぁ正確にはオレとハジメなんだけど。」

どんな事言われるのか緊張して聞いているハジメ。オルタスは普段と全く変わらない口調でハジメの目をじっと見てゆっくりと話す。

「オレとハジメは人間じゃない。魔人って言われる種族なんだ。」

いきなりのカミングアウトに思考が止まる。だがオルタスはそのまま話し続ける。

「まぁ見た目は人間とほとんど変わらないしね。たぶん言われなきゃ気付かなかったんじゃないかな。でも間違いなくハジメは魔人だよ。その眼がその証拠さ。」

そう言うとハジメの眼を指さす。指を差されて我に返るハジメは聞いた事を頭で繰り返し理解しようとする。そして疑問に思ったこ

とを口にする。

「母上も同じ眼なのに違うのですか？」

「お、いい質問だね。さすがハジメだ。」

そう言って一人でウンウン納得しているオルタス。クラウの先を促す視線に気付いてその答えを話す。

「クラウは元人間といえばいいかな。魔人の特徴に＞魂の共有＜というのがあってね。愛する人と一生添い遂げる為に魂を一体化させて分かち合うことができるんだ。これをすると寿命の長い方、つまり魔人の寿命に合わせられるんだよ。普通に生活してれば間違いなく魔人の方が長生きするからね。」

そう言ってオルタスはクラウを見る。クラウはニッコリ微笑んでハジメを見つめる。

「共有すると相手が違う種族の場合目が魔人と同じ色になる。魔人はまたちょっと特殊な目なんだけど。まぁその辺は後にして。あと共有できるのは一生に1回だけ。だから愛する人と一生を添い遂げる為なんて言われてるんだね。なかなかロマンチックな種族だろ？さて、この辺まででなにか質問はあるかい？」

突拍子もない話の連続でついていけなくなりそうになるが、とりあえずそういうものなんだと無理やり理解して気になった事を聞く。

「魔人は寿命が長いって言ってましたが具体的にどれくらいなんですか？」

「あ～魔人の方が寿命が長いって言い方はちょっと違うか。正確には寿命がないんだよ。」

「は？」
「ある程度歳を取るとピタリと成長が止まってね、あとはず～～～っと歳を取ることはない。でも死なないわけじゃない。怪我や病気が原因で死ぬこともあるし、あくまで老衰することがないってだけだね。あ、老衰ってのは歳を取ってお爺さんになることだね。」

それでも十分すぎるだろう！と思わずツッコミを入れそうになるのを堪える。さらにオルタスは付け足す。

「あとこれがとても重要なのだけど＞魂の共有＜をした後に自分か相手が死んでしまうと同時に死んでしまう。共有しているのだからね。だからもしハジメが＞魂の共有＜をしたら自分が死なないようにする上に相手をしっかり守らなきゃいけないよ。してなくても女性を守るのは男として当然の義務だけどね。」

そう言ってニッコリ笑顔でグッと親指を立てるオルタス。話の内容はハードな気がするがオルタスのおかげで重く受け取らずに済んだのはハジメにとってありがたかったかもしれない。

「魔人の目が特殊というはどういうことですか？」
「あ、それはね、実際にやってみるのが早いね。」

そう言うとオルタスはテーブルの上に手を出す。すると手から紫色に光る靄のようなものが出て掌の上で渦巻いている。回転が速くなったかと思ったら火が出て燃える球体になった。ハジメは初めて見るおそらく魔法であろう現象に驚き、オルタスの顔を見てさらに驚いた。オルタスの目が淡く紫色に輝いていた。

「こんな感じで魔力を使うと体の中を魔力が巡り目が輝きだす。使う魔力の量が多ければ多いほど輝きが増すって仕組みかな。オレ達

の姓がアメジストって言われるのもこれのおかげだったりするんだけどね。」

「なるほど。」

前に初めてオルタスに姓がアメジストだということを聞いたとき疑問に思った事だった。前世の記憶で紫色の宝石というのはなんとなく覚えていたがなぜそんなものが姓になったのか。それが魔人特有の目からきていることに納得するハジメ。

そして話を聞いてる途中から聞こうか迷った質問を思い切って聞いてみることにした。今なら並大抵のことは驚かない気がしたので。深呼吸してから疑問を口にする。

「父上と母上って何歳なんですか？」

「む、ハッキリとはわからないけど３００歳くらいかな？」

「それくらいかしらね。」

そう言ってお互いを見つめて笑っている２人を見て眩暈を起こしそうになるハジメだった。

第3話　5歳児が聴く自分の種族について（後書き）

ちょっと短いかもしれませんがここで区切った方がいいような気がしたので。
ここでやっと姓を公開。出すの忘れてたわけではないです。決してないです。でも出す機会あってよかったですマジで。

第４話　５歳児が聴く核人についてと明日からの話

「さて、自分達がどんな種族かというのはこれくらいかな。他にも色々あるけどその辺は追々話すとして。」

オルタスが一度話を区切り次の話を切り出す。ハジメはまだ自分の事で知らない事があるのかと気を引き締めるがふとオルタスの斜め後ろにラウが立っていることに気付く。こちらの視線に気づきラウは笑顔で軽く頭を下げてきたのでどうしたんだろうと首を傾げる。オルタスはそのやり取りを見た後口を開く。

「そう、ラウの事だね。ラウも人間とは違うんだ。」

「魔人なのですか？」

「いやいや、ラウは魔人じゃないよ。核人（かくびと）と言って、うーん、どう説明すればいいか。普通の生き物とは全く別って言えばいいのかなぁ。魔晶石という自我を持つ石があってね。魔晶石は魔力を蓄える性質がある。ある程度蓄えるとその魔力で体を構成して生き物の様になるってわけさ。」

「えっと、じゃあラウのあの姿は魔力の塊ってことですか？」

「そういうことでございます。坊ちゃん。」

そう言うとラウは右手を胸の高さまで上げると指先から蒸発したように消えていった。ハジメの驚いている顔を確認すると反対の手でサッと隠し次の瞬間には消えたはずの指が元通りになっていた。マジックの様な仕草をするせいでどっちなのか混乱しだすとラウは説明を始めた。

「核人の体は魔力そのものですので魔力さえあればいくらでも再生は可能でございます。大まかな外見はそれぞれの核によって決まっ

てますが服などの部分は個人の趣向とお考えくだされば よいかと。魔力をどうやって蓄えるかですが、漂う魔力を吸ったり、先ほどの様に食事を取って食べた物を魔力に換える、後は仕える主に魔力を分けてもらう。そうしたことで蓄えております。」

「仕える主？」

「はい、核人は自分の力だけで変化できるほど魔力を蓄える事はほとんどございません。ですので変化できるほど魔力を注いでくれた人物に感謝し仕える事が多くございます。核人と主の相性など様々な理由でそうではない場合もありますが。」

「ラウは父上に感謝して仕えてる？」

「はい、この大恩は返しきれないものと思っております。」

「いやいや、大げさなんだよラウは。」

照れたオルタスは頭を掻きながら手を振る。そんな2人を見て笑顔になるハジメとクラウ。

「ラウも長生きしてるの？」

「そうですね、石ですので歳を取ることはございません。主やクラウ様と同じくらいとお考え下されば よろしいかと。」

そう言われたが見た目は両親が２０代後半くらいなのに対してラウは４０歳くらいなので同じは無理があるだろうと思ったが見た目が実年齢に全く関係ない事を考えたらなんとも言えないなと考えを改める。

「クロフレイアも同じくらい生きております。彼女も核人でございますよ。」

「え？クロも？馬だけど？」

「核人という名前ですが、変化後にどんな生き物になるかは千差万別でして。馬であったり、中には昆虫のような者もおります。生き

物ですらない者もいるとか。私はまだ見た事がございませんが。」
「な、なんでもありなんだね・・・。」
「あと核人にはそれぞれ固有の特技がございまして。」

そう言うとハジメの方へ来て掌を出す。そうすると掌の上に黒い円が出てきてそこからカップが出てきた。赤ん坊の頃から見ているマジックかと思ったが、いつもはサッと反対の手などで隠した瞬間に出てたりしていたので実際掌から出てきているとは思ってなかった。3人分のカップを出して両親とハジメの前にに置くと今度はポットを出す。カップに注がれる紅茶からは湯気が立っていた。注ぎ終わるとポットを掌に載せる。また黒い円がでてポットが中に入った後円が消える。

「こういうことでございますね。」
「え～っと・・・どういうこと？」
「これは失礼しました。では詳しく説明を。私の特技は収納と申しますか、別の空間に物を出し入れできるのでございます。どれだけでも物は入りますが、空間に入れたい物が掌に載る事と生き物以外という条件がございますね。空間に入っている間は時間が止まっているので劣化したり腐ったりすることもございません。」
「だから紅茶も暖かかったんだね。」
「そういう事でございます。」

ラウがニコリと頷く。空間に入れた物を忘れちゃうことはないか聞くと、空間の中に何が入っているかはちゃんと把握しておりいつでも自分の出したい物を出せるということだった。

「クロも特技あるの？」
「あるにはあるのですが、クロフレイアの特技はあまり生活向きではないと申しますか・・・。」

「へぇ、何だろう。教えてよラウ。」

ファンタジー特有の事に子供の様に（実際子供だが）興味津々なハジメに申し訳なさそうにラウは口を開く。

「クロフレイアの特技は自分を中心に周りを火の海に変えることでございます。」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

思いもよらない特技にハジメは笑顔のまま固まってしまう。

「もちろんクロフレイアは大変賢い馬ですので無暗にそんな特技は使いません。坊ちゃんを怖がらす事もしないのでご安心下さい。」

「う、うん。」

ビックリはしたがその特技を聞いてクロが怖いとは思わなかった。クロと今まで接してきたが怖い思いをすることはまったくなかった。話しかけると理解しているように鳴き声を出すし、ハジメを見るクロの目も優しい目をしていたのでハジメはクロの事が好きだった。

「よし、それじゃラウとクロフレイアの話はこの辺にして次の話をしようかな。」

ずっと黙って聞いていたオルタスが口を開いた。ラウはスッとオルタスの後ろに下がる。それを確認するとオルタスは話を始める。

「まだハジメは5歳だし、家と村の中くらいしかいることないけど

それ以外の所はとても危険な所というのはわかるね？。」
「はい。」

これはずっと前から言われいている事だった。家や村の周辺は比較的安全だが、森の中にはモンスターと呼ばれる生き物が沢山いる。実際村人が森に入ってケガをしたというのも聞いていたし、定期的に村人数人で狩りをして食糧や生活用品の材料にしているのも知っていた。狩ってきたモンスターを見たが鋭い牙や爪を持った熊の様なものもいて子供なんて到底勝ち目のないものだった。

「だからハジメには明日から鍛錬を積んでもらおうと思ってるんだ。あ、体を鍛えて強くなろうってことだね。」
「強く？」
「ハジメも男の子だ。みんなを守れるくらい強い方がいいだろう？」
「はい、そう思います。」

転生前は体を鍛えるなんて特に考えてもいなかったがそれは必要のない生活を送っていたせいだ。だがここはそれでは済まない。自分の身にいつ危険が訪れるかわからないし、周りの人々にも同じ事が言える。5歳まで暮らしたが両親はもちろんラウやクロ、村人達もいい人ばかりで愛着があり大切な人達だとハジメは思うようになっていた。

「よし、それじゃ鍛錬の内容だけど魔法と武器の扱いと色々な戦闘技術、あと体力作りかな。それに勉強もしなきゃいけないね。」
「いっぱいありますね・・・。」
「魔人族は魔力はずば抜けてるのだけど体力とかは普通の人間くらいかそれ以下だから武器を使った接近戦はあまり得意じゃないのだけどね。実際オレはそういうのはからっきしだし。」
「そういうものなのですか。」

そう言われたが5歳のハジメにはいまいち実感がなかった。

「たぶんハジメは魔人と人間のハーフだから普通の魔人より体力は付くと思うんだ。それに成長できる間に鍛えておけばそれを維持できるだろうしね。オレは成長期にそんなに鍛えられなかったから。」

オルタスはそう言うと昔を思い出したのか苦笑いをした。

「で、誰が教えるかなんだけど魔人の使う魔法は人間のとはちょっと違ってててね。これはオレしか教えられないから魔法担当はオレだね。で武器の扱いなんかは村のドルガンだね。彼は村の子供達にも教えてるからそこで一緒に習うからね。」

ドルガンは村の警護をしている人で３０歳くらいの男。肌は日焼けして浅黒く、身長は１８０ｃｍを超え、一見怖そうだが愛嬌のある顔をしており豪快な笑いがピッタリで村では人気者だった。体は鍛えられていて色々な戦闘技術を知っていることから子供や若者相手に村で道場を開いていた。道場と言っても建物があるわけではなく村の隅の空地でやっているのだが。村の子供達とは村に行ったときよく遊んでいるので一緒にやると知って嬉しかった。

「毎日道場があるわけじゃないからそれ以外の日はラウに鍛えてもらおう。」

「ラウ？」

「私も人並み程度には戦う技術はありますのでご安心ください。」

ラウが戦うイメージはまったくなかったので首を傾げるとラウはそう言って一礼した。

「それで最後の勉強担当はクラウだね。」

がんばりましょうねとクラウが微笑むが、勉強と聞いて高校生時代の勉強を思い出しちょっと敬遠したい気分だったが自分が5歳児だということを思い出し心の中で苦笑した。

道場が3日に1回午前中にあるという事なので父とラウも3日に1回午前中にやることになり、クラウとの勉強は2日に1回午後にやることになった。明日は道場があるので父と一緒に朝村に行くことになった。

第４話　５歳児が聴く核人についてと明日からの話（後書き）

家政婦以外人間じゃなかった。という話です。
次回は新しい登場人物が何人かでてきます。詳細はこれから考えるのですが。

第5話　道場と教室での初日のやり取り（前書き）

２０１１／１２／２４　サブタイトルに「第〇話」を付けるようにしました。
２０１１／１２／３０　ドルガンの紹介部分の「警護」を「警備」に直しました。

第5話　道場と教室での初日のやり取り

［ドルガン道場］

次の日の朝、オルタスと共に村の隅にある空地へ向かう。既にそこにはドルガンと数人の子供達がいた。

「お、来なすった。村長おはようございます！ハジメおはよう！」
「やぁ、おはよう！今日からよろしく頼むよ。」
「おはようございます。ドルガンさん。」
「おっと！ハジメ、オレの事は師匠と呼んでくれ！」
「よ、よろしくお願いします師匠。」
「ダッハッハッハ！よろしくな！」

そう言ってドルガンはハジメの頭をガシガシ撫でる。ドルガンは元々冒険者として各地を放浪していたが、１０年ほど前に村人のポメラに一目惚れ。何度も通ってポメラの心を射止めそれからは村に住んでいる。「冒険者としてなかなか優秀だった」と本人は自慢しているが真偽は不明。だが狩りや警備などの知識はとても高く今では村の狩猟団のリーダーで警備主任でもある。その合間に子供達に狩りの仕方や武器の扱い方などを教えて次世代の教育をしている。ちなみに師匠というのは最初に教えていた子供達から言われるようになり本人もまんざらではなかったのでそれ以降師匠と呼ばせるようにしている。

「お、ハジメじゃん！」
「あ、ほんとだー。」

ハジメの姿に気づいて子供たちが近づいてくる。

「おはよヒルナンにヒルダ。レットンさんにトナイにエルレアもおはよう。」

「よう、ハジメ。」

「おはよう、今日から一緒なんだね。」

「おはよう、ハジメ。」

最初に走ってきた2人はヒルナンとヒルダ。2人ともモルヒラの子供でヒルエの弟と妹。ヒルナンはハジメと同い年。短髪で体格も良くわんぱく小僧がピッタリ合う子供だった。村の子供の中でも一番ハジメと仲が良かった。ヒルダは1つ下でヒルエに似ておっとりした感じがある。ちなみにヒルダは見学しているだけで参加はしてない。運動が得意ではないらしく暇だから見に来ているだけだった。レットンは11歳で竜人族と人間族のハーフ。顔は人間だが体に鱗で覆われている箇所がいくつかある。この道場では先輩のお兄さんとして子供達の練習相手や簡単な指導もしている。トナイは人間族の子供でハジメの1つ上。ハジメやヒルナンより少し背が高く、落ち着いた性格で子供達の中ではリーダー的な役割をすることが多い。エルレアはエルフ族の女の子で5歳。あまり感情を表に出さないが微妙な表情の変化をハジメ達は理解している。

道場に通う理由はそれぞれで、ヒルナンは戦えるのがカッコイイから。レットンとトナイは親が狩猟団に入っていて自分達も入りたいと考えているから。エルレアは薬草などいろいろな素材を収集したいからだったりする。

「ふっふっふ、オレの必殺技の餌食にしてやるぜ！」

「道場入って半年で必殺技覚えられるのか？」

半年前に道場に入ったはずのヒルナンの発言に疑問を持つハジメ。そんなハジメにヒルナンは自信満々で答える。

「去年オレが編み出した！」

「うわ、道場関係ねぇ！」

「おいおいヒルナン、ハジメが来たからってはしゃぎ過ぎるなよまた師匠に怒られるぞ。」

「ぐ、気を付ける。」

「まぁ怒られたら笑ってやるから安心しろ。」

「なんだとこのやろうっ！！」

ヒルナンがハジメに掴み掛るのをレットンとトナイが苦笑しながら止める。いつものやりとりなのでヒルダもエルレアも笑って見ていた。ちなみにハジメが丁寧な言葉使いをするのは両親や目上の人くらいなもので普段は軽い口調に変わる。礼儀作法を教えたラウもそこまで徹底しなかった。ラウから話し方を教わりだした頃は世界中こんな馬鹿丁寧な喋り方をしなければいけないのかとゲンナリしていたハジメだったがラウの使っていた教材が『貴族の世界のマナー　子供編』という本だと知り説得して普通に喋るようになった。両親に対しては今更変えられないのと目上の人に敬語は当然なのは前世からのハジメの性分である。５歳でそれができるのは珍しかったりするのだが。

「それじゃハジメ、がんばるんだぞ。」

「はい。」

「任せておいてください！村一番の男にして見せますよ！」

自信満々なドルガンを見て笑いながらオルタスはその場を離れていった。

「よーし、それじゃみんな集合・・・ってもう集まってるか。知ってのとおり今日からハジメも一緒に鍛錬を行う。道場の中ではみんな平等！村長の息子ってのも関係なしだ！。」
「「「はい！」」」
「元々気にしたことないし大丈夫だって。」
「お前はもうちょっと気にしてもいいんだぞ？」
「誰が気にするかぁっ！」

みんなが返事する中またいつものやり取りが始まり結局道場入門直後２人して怒られるのであった。

「・・・とにかく、まずお前らは基礎体力を付けるとこからだ。体力こそがすべての土台だからな！」

この日から体力を付けるべく筋力トレーニングや走ることをメインにやることとなった。遊ぶのを踏まえつつだったのでそれほど苦になる事もなかった。

［カッコイイ村長Ｎｏ．１のオルタスが教えるステキな魔法教室］
（命名オルタス）

「さ、というわけで今日はオレと魔法の勉強だ！」
「よろしくおねがいします父上。」

ここはハジメ達の住む家の庭。庭の大きさは広く、テニスコートくらいの大きさはある。「必要ならもっと大きくもできるのだけどね。」とオルタスは森を指さしていたが今のところ十分な広さだった。

「ああ、よろしく！さて、とにもかくにもまずは魔力のコントロールからだね。それができないと先に進めないので早速やっていくことにしよう。まず手を前に出した掌に魔力を貯める感じで集中する。そうすると掌にこんな感じでモヤっとした塊が出てくる。これが魔力だね。まずここまでやってみよう。」

「はい、わかりました。」

オルタスと同じように手を前に出し掌に集中する。すると体の中を何かがゆっくり巡っている感じがした。その何かを手に集めるイメージで集中を続けると掌に薄ら魔力がにじみ出てきた。

「お、さすがオレの息子！呑み込みが早いね！！さぁ、この状態で鏡を見てごらん。」

そう言うとオルタスはいつの間に持っていたのか手鏡をハジメに向ける。覗き込むと黒かった眼が薄らと紫色に輝いていた。注意してみないと気付かないほどだがその変化にハジメは改めて自分が魔人なのだと実感した。

「では、次は他の部分に魔力を集めてみよう。やり方は一緒だからね。」

言われた通り集中する場所を変えればそこに魔力が溜まって靄のようなものが出てきた。頭から靄が出した時はカッコ悪いなと思ったが練習なので我慢した。オルタスはそれを見て「オレもこんな感

じだった。やっぱ面白いなこれ。」と笑い出したので人前でやるのはやめようとハジメは思った。

「さて、コントロールは日々練習すればもっと早く正確にできるようになるから練習あるのみだね。」

「父上に比べたら出ている魔力が少ないのですがこれも増えるのでしょうか？」

「あぁそれはね。単純にハジメが子供だからだよ。成長に合わせて使用できる量も所持する魔力の上限も増えていくだろうね。」

「よし次は。」とオルタスは2つの石を取り出した。野球ボールくらいのゴツゴツしたただの石のようだが2つは色が違った。

「これは魔力検石（けんせき）と言ってね。自分の消費する魔力の最大量と所持する魔力がどのくらい減ってるかを調べられる石なんだ。これで目安を立てることで魔力切れを防げるってわけだね。あくまで目安だけど。こっちの白い石の方が消費量を測れて、黒い石の方が所持する量の減り具合を見れるんだ。まぁ試しにやってみるね。」

両手に石を持つとオルタスは白い石の方に魔力を込める。そうすると白い石は電球のような輝きを放ち出す。

「こんな感じで込められた魔力の大きさに合わせて輝きが変わるわけだね。それでこちらの黒い石を見てごらん。」

黒い石の方を見ると若干色が薄くなっていた。

「こちらは魔力が減るのを感知すると色が薄くなるんだ。持ってる人の魔力が0になれば真っ白になる。まぁそうなると魔力切れで倒れちゃうから本人は確認しようがないけどね。ちなみに魔力切れに

なると場合によっては命に係わるから気を付けてね。」

そう言ってオルタスは「ハッハッハ」と笑う。命がけだったりするのかこの検査とハジメは少し緊張した。

「まぁ消費する最大量が所持する量を上回るなんてないから大丈夫さ。魔力切れになりかかればすぐ自分で気付くしね。」

オルタスは石をハジメに渡す。ハジメは緊張した面持ちでそれぞれの石を手に持ち白い石の方に魔力を込める。白い石がじわりと輝くのを確認できた。それを確認した後黒い石の方も見てみる。だが黒い石はまったく変化していなかった。それにはオルタスも真剣な顔になる。ハジメは問題が起きたのかと変な汗が出てきた。

「これは・・・・どういうことだ。まったく減ってないのか？」

「減ってない？」

「うーん・・・。ハジメもうちょっと続けてみて。危なくなったら止めるからね。」

「はい、わかりました。」

それから３０分ほど続けたが黒い石はまったく変化がなかった。それを見ながらずっと考えていたオルタスが口を開く。

「ふむ、やっぱり減ってない。消費量より回復量が上回ってる、かな。」

「回復量ですか？」

「うん、普通は魔力の回復には時間がかかるんだ。０に近い状態で全快まで回復するならオレでも半日近く休まなきゃいけないくらいにね。ハジメの場合はたぶん常に回復し続けてるんじゃないかな。どのくらいの回復量かはわからないけど今のハジメの消費量では減

ることがないってくらいだろうね。」
「珍しい事・・・なのですかね？」
「ん～珍しいというか初めて見たよ。３００年生きてきたけど初めてだ。」

自分が規格外だと知り困惑するハジメを見てオルタスは安心させるように笑顔でハジメの頭を撫でる。

「まぁ魔力切れの不安が無くなったってだけさ。ちょっとラッキーくらいに考えておけばいいよ。」

オルタスの笑顔を見てハジメの顔にも笑顔が浮かんだ。それを見てオルタスは思い出したように注意点を教える。

「そうそう、魔力切れの不安がないからと言って魔法が使い続けられるわけじゃないからね。集中力や平常心、色々な要素も魔法には必要だからその辺も鍛えていかないとね。」
「はい！」
「よし、いい返事だ！」

その日の晩オルタスが話したことでハジメの能力をクラウやラウも知る事になった。どんな反応するのか不安だったが2人とも驚いていたのは最初だけで「さすがハジメ（坊ちゃん）。」で納得した。楽観的な家族だなと思ったがそんな家族の反応が嬉しかった。

第5話　道場と教室での初日のやり取り（後書き）

話が思ったより長くなりそうだったので2つに分けました。ハジメの能力は魔力高速回復みたいな感じですかね。チートなのかな・・・地味ですね。
後半も早めに作れるよう頑張ります。

第６話　講座と勉強会での初日のやり取りとその後（前書き）

２０１１／１２／３１　誤字修正しました。「迷惑気周りない」→「迷惑極まりない」　ご指摘ありがとうございます。

第6話　講座と勉強会での初日のやり取りとその後

［ラウスペムスの体術講座］

「さぁ今日から坊ちゃんには体術を学んでいただこうと思います。武道ですので礼儀作法も合わせて教えさせていただきます。」

「よろしくお願いします。」

ハジメはそう言って一礼する。それを見て頷き「こちらこそよろしくお願いします。」とラウも一礼する。

「さて、なぜ体術かといいますとドルガン君から狩りや武器の扱いを学んでいくわけですが常に武器を使えるわけではございません。狭い場所での戦闘は武器を振れなかったり、街中や人の沢山いるところで武器を振り回すことなど迷惑極まりない事ですし、手元に武器がない時に襲われたりする事もないとは限りません。素手で素早く相手を無力化する術を持っているのが一番だと思うからでございます。」

「なるほど。」

そう言われて納得した。モンスターなどを狩るのは精神的にまだ何とかなりそうな気がしていたが（それでも日本の一般人からしてみればかなりハードなものなのだが）、人を武器で傷つけるまたは殺すというのはハジメには荷が重い事だった。だが盗賊など暴力でモノを奪うというものが存在するという話もハジメは聞いていた。日本にもそれはあったが人が人を殺すという事がさらに身近に存在するこの世界では「恐ろしくてやりたくない」では済まなくなる事

が起こり得るのも理解はしていた。

「とりあえず最初の目標はこの辺にしておきましょうか。」

そういうと掌の異空間から物が出てくる。ハジメと同じくらいの大きさの石だった。それをひょいと持ち地面に置く。

「あ、ちょっといい？ラウ。」

「なんでございましょう？坊ちゃん。」

「手に乗る物なら何でも収納できるんだよね？」

「さようでございます。」

「具体的にどれくらいの大きさまでいいの？」

「そうでございますね。手で持ち上げられさえすれば大きさは問題ないですね。今収納されているもので一番大きいものは馬車、でございましょうか。」

「そ、そうなんだ、うん、ありがとう。」

（そういやいつも使い終わると馬車が消えてたけど仕舞ってたのか・・・。）

「それでは」とラウは話を元に戻す。

「坊ちゃんにはこれを目標にしていただきます。」

ラウは石の前に立ち構える。腰を落とし拳を脇の所まで引き「フッ」と吐くと同時に拳を突き出す。ゴォン！という音と同時に石は縦に真っ二つに割れてしまった。ラウがこちらを見たのでハジメは「無理無理！」と首を横に振るしかできなかった。

「いきなりこれをしろとは言いませんのでご安心下さい。鍛錬を重ねればこういうこともできるという事でございます。」

「そ、そうなんだ・・・ラウは誰かから教わったの？」
「いえ、私は本で学んで体得したのでございます。」
そういうと掌から様々な格闘技の本が出てきた。
（本読んでマスターって無茶苦茶すぎるだろっ！）
教科書マスターラウスペムスによる体術訓練が始まった。

［クラウの勉強会］

「それじゃ今日は読み書きと計算。お金の事と種族について勉強しようね。」
「はい、母上。」
家のリビングのテーブルで向き合って勉強を始めるクラウとハジメ。まずは前から少しずつやっていた読み書きと計算の続きから。文章は日本語と同じような構成だったので単語さえ覚えていけば特に問題はなかった。文字はローマ字に近かったが数はひらがなくらいに多かった。計算はさすがに高校生だったので5歳の計算なんて片手間でも余裕がある。最初の頃まったく間違えないのでクラウは喜んでいたが、あまりにサクサク解いていくので教え甲斐がないとふてくされだしたのを見て気を使ってたまにわざと間違えたりしていた。最近は5歳くらい上の子がやる計算をやっている。ちなみに

教材はすべてラウが用意してくれている。ラウは本を集めるのが趣味で異空間には図書館並みに本があるらしい。たまにエルレアなどが本を借りに来ているので実際に図書館になっている。

「それじゃ読み書きと計算はこの辺にしてお金について勉強しましょう。」

そういうとテーブルに数種類硬貨を出した。

「まずこれが銅貨、一番価値が小さい硬貨ね。だいたい街とかでご飯を食べようとするとこれが5枚くらいいるかな。そして銅貨が１００枚でこの銀貨が1枚になるの。そしてまたこの銀貨が１００枚でこの金貨になる。わかるかな？」

（銅貨1枚１００円くらいかな。食事1食約５００円ってとこか・・・。ってことは銀貨は1万円、金貨は１００万円と考えればいいかな。）

「たぶん大丈夫だと思います。」

「うん、そんなに難しい計算を使うわけじゃないから１００枚で次の硬貨1枚と覚えておけばいいわね。」

そこからお金の計算問題をいくつか出され特に問題がなかったので次の話になった。

「次は種族の事についてだね。村の人たちを見てるからわかると思うけど『人間族』の他にも色々な種族がいるの。私が知っているのは『獣人族』、『エルフ族』、『ドワーフ族』、『竜人族』、そして私たち『魔人族』ね。ちなみに『人間族』以外の種族を『亜人』って呼んだりするわ。これは『人間族』が他の種族に対して呼ぶの

がほとんどだけどね。この村ではまずありえないことだけど他の都市や街では『亜人』を差別したりする事があるのよ。とても悲しい事なのだけどずっとそうしてきた人々の考えを変えるのは難しくて、なかなかその差別をなくすことができないの。」

クラウはとても悲しそうな顔をしてそう言った。ハジメもそう言った人種差別がある事は前世で知っていた。だが日本にいてそれを実感する事はそれほどなかった。ただ「世界のどこかでそういう事がある」程度にしか考えていなかったが、今の友人達には『人間族』以外の種族もいる。そんな友人達がそのような迫害を受けるようなら考えるととても他人事にはできないとハジメは思っていた。真剣な顔で考えているハジメを見てクラウは優しく微笑んだ。

「それじゃ、各種族の特徴を教えるわね。まず『獣人族』は顔が動物の顔をしていて、身体能力も高いの。寿命は人間族と同じくらいね。それで『エルフ族』はとがった耳をしていて男性も女性は綺麗な顔をしているわね。寿命は３００年くらいかしら。『ドワーフ族』は小柄で大人でも今のハジメくらいかしら。鍛冶などの物作りが得意な種族ね。寿命は２００年くらい。そして『竜人族』は顔が爬虫類みたいになっていて体も鱗で覆われているわ。でも彼等にトカゲなどと言ってはダメ。これは侮辱になるからね。寿命は２００年くらいかしら。どの種族にも言えるけど寿命はあくまで平均で例外は沢山いるからね。そして『人間族』に比べたらどの種族も人口が格段に低いの。」

『人間族』が主体となっている国や街がほとんどで他の種族が主体になる街は数えるほどしかなく、村でひっそりと暮らしているというのがほとんどだった。

「『魔人族』はどうなんですか？他に村とかはあるのですか？」

ふと思った疑問をクラウに聞いてみるとクラウは困ったような顔をして質問に答えた。

「これは大事な事だからオルタスがいう事なのかもしれないけど、『魔人族』はもう私達しか残っていないらしいの。」

その答えにハジメは驚愕する。世界で『魔人族』は3人だけ。まさに絶滅危惧種もいいところだった。

「詳しくはオルタスも話してくれないのだけどオルタスが住んでた村が小さい頃に滅んでしまって、残ったのがオルタスだけだったらしいの。その後オルタスは世界各地を回ったようなのだけど結局他の『魔人族』を見つけることができなかった。そう聞いているわ。」

「世界各地という事は父上は冒険者だったのでしょうか？」

「ええ、世界を旅していた冒険者だったわ。傭兵団に入っていた時期もあって私達が知り合ったのもその頃ね。」

クラウは昔を思い出すように嬉しそうに話す。

「え・・・ということは母上も冒険者だったのですか？」

「う～ん、冒険はあまりしていなかったし傭兵団に所属していたわけだから傭兵って言った方がいいかしらね。」

顎に指を当てて首を傾げて答える。可愛らしい仕草だが思いかけずクラウのバイオレンスな過去を知ってしまい「絶対に母上を怒らせないようにしよう」と心に誓うハジメだった。

［その後の各訓練の様子］

1年ほど練習を重ねたあたりで村の外に狩りに行く事になった。森は危険なので村を出て少し歩いた草原で獲物を探す。森に比べれば比較的弱いモンスターが多いからだった。それでも念の為ドルガンはもちろんラウや狩猟団のメンバーも数人同行していた。獲物を見つけ周囲に他のモンスターがいないか警戒、安全を確認してそれぞれ目で合図を送り行動に移る。練習を繰り返していたチームでの動きもスムーズにできた。結果、狩りは順調に終わり村へ無事帰還できたが初めて生き物を殺めた子供たちは各々表情が違っていた。達成感を感じて喜んでいるヒルナン、レットン、トナイ。淡々と本と比較しながら狩りで取れた獲物や薬草を吟味するエルレア。ハジメは表面は平常心を保っていたが内心は罪悪感に襲われて震えを抑えるのに必至だった。狩った獲物は小動物だったが刃物で刺した時の感触や事切れる様が脳裏から離れなかった。すぐにハジメの様子に気付いたオルタスに話しかけられそれを打ち明けると笑顔で頭を撫でた。

「生き物を殺める事に何も感じなくなる事が一番恐ろしいことだよ。ハジメは間違ってはいない。その感じたことを心の隅に留めておくんだ。留めた上で生きる為、守る為、いろいろな理由があるだろうけど『やり遂げる』という覚悟を持つことが大切だね。その為には心を強くしなきゃいけない。」

オルタスは真剣な眼差しでハジメにそう教える。ハジメはその言葉を噛み締めた。その後ハジメは少しずつだがその覚悟を持てるようになっていった。

魔法はハジメの覚えも良く、魔力のコントロールもだいぶ上達した。小さな火の玉や電気なども起こせるようになった。

「うん、いい感じだね。『魔人魔法』に大切なのは魔力でどんな事をするかというイメージ。魔力を使ってどんな現象を起こそうとしているのかはっきりイメージしていないとうまく発動しないんだよ。」

「人間の使う魔法はどう違うのですか？」

「あ、そうだねそちらも教えておこうか。」

ハジメは手を止めオルタスの話を聞く。

「人間は魔力で直接現象を起こせない。呪文や魔法陣などの補助が必要な上に自分と相性のいい属性の魔法しか使えないんだ。精霊の存在が必要不可欠だね。」

「精霊？」

「それぞれの属性には精霊がいてその精霊の力を借りて魔法が発動する。呪文で精霊にお願いして魔力をあげる、精霊はその魔力で現象を起こす。そんな感じかな。だから相性のいい精霊の魔法しか使えないというわけだね。ちなみに精霊と言っても姿形が見えるわけじゃないんだ。そういうものがいると考えた方がわかりやすいって考えておけばいいよ。」

「オレにも使えたりするのでしょうか？」

「うん、自分に合った属性なら呪文を唱えればできるよ。各属性の初歩魔法の呪文は知ってるからやってみるかい？」

オルタスから呪文を教えてもらい試してみたが発動したのは火と

風だけだった。水、雷、土は使えなかったが、『魔人魔法』はどの属性も使えるので問題はなかった。

「ちなみに光と闇は特殊でね。『魔人魔法』でも使うことができないんだ。精霊とは別の存在の協力が必要だからね。」

「別の存在。」

「神様とか悪魔とかね。まぁこれも見えるわけではないので存在を確認できないけど。とにかくこの２つは相性がいい人のみ使える魔法だね。」

『魔人魔法』も万能ではなかったがそれでもイメージと必要な魔力さえあれば大概発動できるのはズルいのだろうなとハジメは思った。

（色々面倒なことになりそうだしあまり人に見せびらかさないようにしよう。）

ハジメはこっそりそんなことを考えていた。

ラウから学んでいた体術だったが思いのほか自分に合ってた。前世で刃物などの武器を使った事がなかったのと体術は前世でも馴染みのあるもの（実際にやっていたわけではないが）だったのと人を殺めず無力化できる術というのがハジメに安心感を持たせていた事が主な理由だった。もちろん鍛え上げれば素手でも簡単に人を殺められるのだが。

体術の鍛錬おかげで身のこなしなどもだいぶ上達した。道場でのヒルナン達との組手でも素早くトリッキーな動きで相手の翻弄して

隙を作り攻める戦い方が自分に合ってる気がした。

「体術と剣と魔法を組み合わせて自分の戦闘スタイルを作れないだろうか。」

ハジメはオリジナルの戦闘スタイルを編み出してみようと考えるようになっていた。ドルガン、オルタス、ラウ、と相談しながら少しづつ形になっていった。

ちなみにラウの出した課題「石を拳で割る」はまだ成功していなかった。

勉強会にはトナイとエルレアとヒルダも参加するようになっていた。トナイは今まで読み書きと計算をあまり勉強していなかったからそれをやりたいという理由で。エルレアはラウから借りた本でわからないところをクラウやラウに教えてもらう為。そしてヒルダの理由はいたって単純でトナイが参加しているから。成長していくにつれてヒルダはトナイへの恋心を膨らませていて周りには完全にバレていた。残念ながらトナイには伝わっていないのが周りはもどかしかったがヒルダから「余計なことはしないでよね！」と釘を刺されているのでみんな見守るしかできなかった。

参加していないレットンとヒルナンは「勉強なんてごめんだ！」と断固拒否の姿勢を崩さず勉強会の時間は2人で道場で自主練習をしているらしい。そのおかげか年上のレットンと練習をするヒルナンはメキメキ実力を上げていた。ただし剣術だけ。

そんな日々を過ごしハジメは9歳を迎えようとしていた。

第6話　講座と勉強会での初日のやり取りとその後（後書き）

用語等を『』で囲ってみました。
生き物を殺める事に関してのオルタスの発言は人に教えを説くような事をしたことがないので的を得てない発言かもしれません。正解がなにか・・・難しいですね。

昔話　あるキャンプでの一場面

［約２８０年前のあるキャンプ］

「ゴクゴクゴクゴク・・・・プハァ！！いやぁ、助かった！マジで死ぬかと思ったぜ！」

「怪我が無くてなによりだ。だが、あんなところ一人でうろついてたら命がいくつあっても足りないぞ。」

一気に水を飲み干す金髪の男に隣に座っていた大男が声をかける。

「いやいや、まさかあんなのがわんさかいるとは思わなくってさ！やっぱ世界は広いね！ハッハッハッハ！」

そう言って話しかけてきた大男の肩をバシバシ叩いた。それに対して大男は溜息を吐く。

事の発端はキャンプをすることを決め仲間達と準備をしていたところモンスターの群れに追われているこの男が目に入ったことからだった。見つけてしまったものはしょうがないと仲間達と救援に向かい無事救出できたというわけだった。

「ところであんたらはなんの集まり？なんかゴッツイ鎧とか着ちゃってさ。」

金髪男は不思議そうに大男に尋ねる。問いかけられた大男は「何言ってるんだ」と質問に答える。

「この恰好で観光してるように見えるか？オレ達は傭兵だ。というかお前の恰好の方が疑問なんだが。」

そう言って大男は金髪男をマジマジと見る。金髪男は帽子とシャツとズボンだけという軽装で大き目の肩掛け鞄を1つ持っているだけだった。

「オレの住んでた田舎ではこれで全然問題なかったんだけどな。世の中なにがあるかわからないってこったな！ハッハッハッハ！」

そう言うとまた大男の肩をバシバシ叩いた。大男は素手で鎧をそんなに叩いて痛くないのかと思ったが平気な顔しているので気にするのをやめた。

「あ！そういやあのバケモノ倒した兄さんにお礼言ってなかった！」
「おお、それは言っておくべきだな。おい！オルタス！ちょっとこっち来い！」

そういうと少し離れたところで仲間達と談笑していた青年を呼ぶ。

「なんですか団長。」

オルタスと呼ばれた青年は呼んだ大男に問いかける。大男はこの傭兵団の団長だった。

「おう、こっちのあんちゃんがお前にお礼が言いたいとよ。」
「あぁ、別に気にしなくてもいいですよ。」
「いやいやいや！あんたは命の恩人だぜ！アンタがいなかったらオレは今頃バケモノの腹の中だったさ！」

嬉しそうにオルタスの手を取りブンブンと握手をする。オルタスは苦笑するしかなかった。

「あのバケモノ倒したのはわかるんだけど兄さんはどうやって倒したんだ？」

その後、金髪男と団長とオルタスで雑談をしていると不意に金髪男がそんな事を聞いてきた。

「え？どうやってって魔法でだけど。」
「魔法！？おおおおおお！！！すげぇ！そんなことできるのか！いやマジ世界広すぎるな！！」
「魔法も知らないってお前はどんだけ田舎にいたんだよ。」

想像以上に驚く金髪男に団長は呆れ果てる。

「それに魔法使ってる時の兄さんの目も凄かったなぁ！まるでアメジストの様な輝きだった！。」
「アメジスト？」
「なんだそりゃ？」

初めて聞く言葉にオルタスと団長は首を傾げる。

「アメジスト知らないのかぁ。アメジストっての紫色の宝石だよ。オレも実物は見たことないんだけど兄さんのあの目みたいな感じだよ。たぶん。」

「たぶんかよっ！！」

思わず団長がツッコミを入れる。だが少し考えてオルタスにある提案をする。

「オルタス、お前たしか姓が無かったよな？せっかくだしアメジストにしちゃえばいいんじゃねぇか？宝石の名前なんてカッコイイじゃねぇか。」

「おおお、そいつはイイネ！カッコイイよ兄さん！。」

「は、はぁ・・・別にいいですけど。」

オルタスは困惑しながら答える。それを笑いながら見ていた団長に金髪男は話しかける。

「団長さんはすげぇゴツイし鉄壁って感じがするからダイヤモンドかな。」

「それも宝石か？」

「ああ、透明なんだけどすっげぇ硬いんだぜ！」

「ほう、それはいいな。」

「団長にピッタリじゃないですか。」

団長もまんざらではないような様子だった。そうすると話を聞いていたのか他の仲間達が集まってきた。

「え、なになに宝石の名前を姓にするの？いいなぁ、アタシもしたい！」

「お、じゃあオレにもつけてくれよ！」

「お前が宝石ってガラかよ、石でいいよ石で。」

「オレが石ならお前は砂利だがな！」

「なんだとコラァ！」

「やんのかコラァ！」
「ん、ちょっと待て、おい！なんか順番待ちの列できてるぞ！」
「げ、いい名前がなくなる！」
「あれ？クラウは付けないの？」
「私は別に・・。」
「バカだなぁクラウはアメジストって決めてんだよ。なぁ？」

そう言って男はニヤリと笑う。質問した女の方も納得の表情を浮かべる。

「あーそういうこと。それならクラウは必要ないよねー。」
「ちょ、ちょっと！変なこと言わないでください！！」
「おーおー赤くなっちゃって。若いっていいねー。」
「ね～。っと私も並ぼうっと。」

傭兵団には元々身分が低く姓を持つ者がほとんどいなかった。だから姓を持つことにちょっとした憧れを持つ者も少なくはなく、姓を持っていなかったほとんどの団員が金髪男に宝石の名前を付けてもらった。名前の由来は外観の特徴から付けられるのがほとんどだった。大半が金髪男の思いつきだったのだが。知らない名前の宝石ばかりだったのでそれぞれがどんな宝石か説明を受けて各々納得していた。姓を持つ上に宝石の名前を付けれたというわけでその日のキャンプは大いに盛り上がった。

昔話　あるキャンプでの一場面（後書き）

間話です。でも結構キーポイントだったりそうじゃなかったり。こういうのが伏線ってやつですかね。

第7話　草原での事件と出会い

「うおりゃーーー！」

ヒルナンは木剣を振り上げハジメの頭を目掛けて振り下ろす。ハジメは横に避けて左手に持っていた木剣でヒルナンの首に向かって振るうが、素早くしゃがんで避けられる。そのまま転がり距離を取るヒルナン。ハジメは体勢を整えようとするヒルナンに向かって木剣を投げつける。

「うおっ！」

まだ立ち上がっていなかったヒルナンは顔に向かって飛んでくる木剣を上半身を反らして躱す。後ろで地面突き刺さる木剣。だが引っ張られるようにまたハジメの手元に戻っていく、よく見ると木剣とハジメの手には紫色に光る縄のようなものが見えた。

「おい！　魔法使うのはズルいだろっ！！」

「全力でかかってこいって言ったのはお前だろ。」

「そうか、ならしょうがないな。ってなるわけねぇだろうがぁぁ！！」

「ノリツッコミご苦労様です。」

ヒルナンがツッコミながら斬りかかってくるのを木剣を両手で持ち受けとめる。

バキィ！！

ヒルナンの木剣が真ん中で折れて切っ先の方が飛んで行った。ハ

ジメの木剣には傷一つなかった。よく見るとハジメの木剣は紫がかった透明な薄い膜に覆われていた。

「木剣を強化までしてやがるとは・・・。」
「こうでもしないとまともに受け続けられないからな。」
「チッ、しょうがねぇここまでだな。」

そう言ってヒルナンは力を抜き、飛んで行った切っ先を拾いに行った。ハジメは痺れている両手を見て苦笑いをしていた。ヒルナンの剣の腕前は同年代ではダントツで6歳離れたレットンとも対等に戦え、たまに勝っていたりした。愛用していたのは大き目の木剣で、ハジメは小さ目の木剣。普通に受けていたらハジメの方が先に折れるのだがハジメは魔法で武器を強化してそれを防いでいた。

ハジメは魔人特有の魔法『魔人魔法』を2つ覚えていた。正確には編み出していた。『魔人魔法』に決まった形はなく自分で好きなように魔法を作れた。ハジメが作った魔法は＞魔力塗装（コーティング）＜と＞魔法（ロープ）の縄＜。＞魔力塗装（コーティング）＜は身に着けているものや武器を魔力で強化する魔法。格段に頑丈になり、刃物などは刃こぼれもしにくくなる。＞魔法（ロープ）の縄＜は手から魔力でできた縄を出す魔法。先ほどの様に剣などにも繋げられるし、伸縮も自在。魔力が縄のようになっているだけなので結ぶ必要はなく念じれば繋がるし、先端を曲げれば輪になる。強度も込めた魔力によるので普通のロープより頑丈にできた。狩りや日常生活で重宝するので使い勝手のいい魔法だった。

「子供達の中でヒルナンと対等に戦えるのはもうレットンさんとハジメくらいなものだね。」

広場の端に行くと、そう言ってトナイが話しかけてきた。ヒルダも後ろに付いてきていた。

「トナイも兄さんの相手できるじゃない。」
「いやいや、まともに戦えないよ。アイツの上達っぷりは異常だよ。それについていくハジメもね。」
苦笑いしながらトナイが言う。ヒルダは納得してないのか頬を膨らませていたが、何か思い出したのかすぐに顔が元に戻った。
「そういえば兄さん、騎士に憧れているみたい。この前ドルガンさんと話してて騎士の事聞いてたみたいだから。」
「へぇ、アイツ騎士になりたいのか。」
「あ～ヒルナンくらい才能あればなれるのかもね。」
驚くハジメにトナイがそう答える。
「みんな将来に向かって頑張ってるわけだ。」
「なにおじさん臭い事いってるんだハジメ。」
トナイは呆れた顔をしてハジメを見る。トナイとレットンは目標通り狩人としての技術を着実に身に着けている。レットンは狩猟団の見習いとして狩りに付いて行くようになった。トナイもすぐ見習いとして参加するようになるだろうとハジメは考えていた。
ヒルダは相変わらず恋に生きる乙女でいつもトナイの傍にいた。最初はトナイがまったく気付かず周りがもどかしく思っていたが、鈍感なトナイもいい加減気が付いたのか最近は2人でいる所をよく見かけるようになった。今では村公認のカップルになっている。
「そういえばエルレアも学者になりたいって言ってなかったかな。」
「あ～エルレアなら納得な気もする。」
トナイがそう言って弓の練習をしているエルレアを指さす。ハジ

メも納得した顔でエルレアを見る。薄緑色のウェーブの掛った髪を後ろで束ね、真剣な表情で弓の練習をしていた。エルレアは益々美に磨きがかかっていて、今の練習風景も1枚の絵のようだった。本人はまったく美に無関心だったが。昔から自分の知りたいことをとことん追求する性分でその知識量は子供達の中では飛びぬけていた。

「ハジメはなにかしたい事見つかってるのかい？」

トナイの問いにハジメは悩んでしまう。ハジメはまだ具体的な夢がまだはっきり決まっていなかった。ただ楽しく毎日を過ごしていてはっきりとした将来を考えていなかった。

（高校生の頃と変わらないなオレって・・・。）

「うーん、まだ見つかってない・・・かな。」

「そっか、やりたい事見つかるといいね。」

「ああ。」

（やりたい事かぁ・・・。）

「ねぇねぇ！　私の将来の夢聞かないの！？」

ヒルダが待ちくたびれたように問いかけてきた。それにハジメは呆れながら答える。

「だって、お前どうせトナイのお嫁さんだろ？」

「どうせって言わないでっ！」

プンプン怒るヒルダを見てトナイは「アハハハ・・・。」と苦笑い。ハジメも「やれやれ」と怒るヒルダを宥めた。

将来の夢ははっきり決まっていなかったが、ハジメはやりたいことが１つあった。

（世界を見てみたい。）

冒険者だったオルタスやドルガンの話を聞くと、今住んでいる大陸というよりは島に近い。世界はとても広くいくつも大陸があり、その中には様々な国があるらしい。世界がどれほど広いのか正確には分からなかったが、２人の冒険者の話はとても興味深いものだった。話を聞きながらハジメは自分でも見てみたいと思うようになっていた。

それから数日後、ドルガン、トナイ、ヒルナン、エルレア、ハジメの５人は草原に狩りに来ていた。この辺りのモンスターは格下になっていたので特に問題はなく、必要な量の獲物が獲れて戻ろうとしていた時だった。最初に異変に気付いたのはトナイだった。

「ん？　なんだろアレ・・・。」

トナイの言葉に全員がトナイの視線の先を見る。１００ｍ程離れたところを馬車と騎士を乗せた馬数頭が大急ぎで走っていた。その後ろを十頭近くの馬が追いかけている。

「む、あれは盗賊か！？」

ドルガンの声に子供たちは緊張する。子供達は盗賊を見るのは初めてだった。盗賊と思しき一行は見る見るうちに馬車に近づき一人

が馬車を引く馬に向かって矢を射る。２頭の内の１頭に刺さり転倒する。それに驚いたもう１頭も驚き止まってしまった。馬車の周りを盗賊が囲う。周りを走っていた騎士達が馬車を守るように盗賊を威嚇する。騎士が５人に対して盗賊は１０人程だった。

「いかん！　ヒルナンとハジメはオレについてこい！トナイとエルレアは弓で援護してくれ。いいか、無理に倒そうとするな追い払うことを考えろ！」

「わかりました師匠！」

「よっしゃ！まかせろっ！」

トナイとヒルナンが返事をする。

「ちょっと待ってください。」

そう言うとハジメはドルガンとヒルナンの武器と服に触れる。紫がかった透明な薄い膜が武器と服を覆う。＞魔力塗装（コーティング）＜を２人にしたのだった。＞魔力塗装（コーティング）＜は自分以外にもできるが今のハジメでは１５分ほどしか効果がなかった。

「これでよしと。」

「お、すまんなハジメ。よし、いくぞ！」

３人は急いで馬車の方へ向かう。その後ろをエルレアとトナイが追う。騎士と盗賊は戦闘を始めていた。

「うおおおおおお！」

ヒルナンは騎士とにらみ合っている盗賊の後頭部目掛けてドロップキックをお見舞いする。「ふぐおっ！？」と吹っ飛ぶ盗賊、向き

合っていた騎士も急にこちらに突っ込んでくる盗賊を慌てて躱す。他の盗賊や騎士達は何が起きたのかと一瞬止まる。

（（（（あのバカ・・・。））））

ドロップキックをした後そのまま地面に落ち、慌てて起き上がるヒルナンを見て助けに入ったメンバーは同じ感想を思った。だがその行動で呆気に取られている間にドルガンは盗賊の1人の両足を斬りつけ行動不能にする。トナイとエルレアも1人づつ射て行動不能にする。致命傷は避けていたので死んではいなかった。

「これ以上怪我したくなければさっさと去れ！命までは取らない！！」

ドルガンが叫ぶと盗賊のリーダーらしき男が「チッ！」と舌打ちして撤退の合図をした。それに合わせて他のメンバーは怪我をした者を馬に載せ早々に撤退していった。

「あれ、呆気ねぇな。これで終わりか？」

ヒルナンがつまらなさそうに呟く。

「馬鹿野郎！！　敵が複数いる所であんなことするんじゃねぇ！あんな無防備な状態さらせば殺してくださいって言ってるもんだぞ！！」

ドルガンの怒声が飛びヒルナンはシュンと落ち込む。ヒルナンが怒られている間に離れていたトナイとエルレアも集まる。騎士達は様子を伺っていたが、ドルガンの怒声が止んだあたりで声をかけてくる。

「すまない、何処の何方か知らないが助かった。」
「いや、たまたま見かけただけだ。気にすることはない。」
「あのまま襲われていれば命はなかっただろう。数人怪我をしていたしな。」

騎士の中には矢が刺さって怪我をしている者がいた。たしかにあのまま騎士だけで戦っていても危なかったかもしれない。とドルガンは思った。身に着けている装備の良さ、撤退する決断の速さなど盗賊に違和感を感じたからだった。

（今のはただの盗賊というわけではなさそうだ。）

「すまないがどこか休めるような場所はないだろうか。危険な場所にいつまでもいるわけにはいかなくてな。」

そう言うと騎士は馬車の方に目をやる。それを見てドルガンは「貴族でも乗ってるのか。」と考えた。

「それなら村に来るといい。怪我の治療くらいならできるだろう。」
「ふむ、それはありがたいが・・・この辺に村があるなど聞いたことがないが・・・。」
「普段滅多に人がくることない村だからな。」

ドルガンは笑いながらそう答えた。一部始終を聞いていた子供達にドルガンは説明をする。

「と、まぁ聞いた通りだ。この人たちを村まで案内する。エルレアとトナイは一足先に村に戻ってこの事を伝えてきてくれ。」
「「はい。」」

２人はすぐ村に向かって走り出した。残り３人は騎士達と怪我人の応急処置や死んでしまっていた馬を馬車から切り離したりするのを手伝って村へ出発した。その様子を遠くから伺う者がいたがハジメ達は気付くことはなかった。

村に近づくにつれて騎士達は驚きの声を上げた。

「まさかこの森に住む者がいるとはな・・・。それなら子供達のあの勇敢さも納得だ。」

聞くところによるとこの森は『不帰の森』や『魔物の森』などと言われ普段誰も近づかない危険地区に指定されていた。他の地域に比べたら格段にモンスターが凶暴との事だった。ハジメ達は危険なのは分かるがここが基準だから実感がわかなかった。

森に隣接する村に到着すると騎士達もやっと安堵の顔を見せる。村では事前にトナイ達から事情を聞いていたオルタスが待っていた。ドルガンからオルタスが村長だと説明を受けた騎士はオルタスに感謝の述べて一礼する。馬車を村の中に入れると村人は「なんだなんだ。」と集まってくる。馬車の扉が開き中から１人の少年が降りてくる。金髪で整った顔立ち、見るからに利発そうな少年が降りると周りの騎士達は少年に向かって頭を下げる。少年はオルタスに向かって話しかけてくる。

「危ない所を助けて下さりありがとうございます。私はグァロキフス王オルティダの息子シャワルと申します。」

「へぇ王子ですか。」

この大陸を治めるグァロキフス国の王子と知り、村人は驚いてざわつく。オルタスは特に慌てる様子もなく平然としている。

「まぁここで話すのも何なんでオレの家に向かいましょう。」

自分の家に案内するオルタス。ヒルナン達と別れハジメとドルガンもオルタスに付いて行った。

第7話　草原での事件と出会い（後書き）

この話を考えるのに時間かかってしまった。王子登場させるどうか最後まで悩みましたが出すことにしました。

第8話　王子達との交流と襲撃

［とある街の酒場］

「くそっ！　なんであんなとこで邪魔する奴が出てくるんだっ！」

男はグラスをテーブルに叩きつけるように置く。同じテーブルに座る男達も一様に顔に苛立ちを浮かべていた。男達は拠点を持たない流れの傭兵達だった。前に居た国での仕事も減ってきたので、十日ほど前にこの国に来ていた。傭兵と言っても金になれば殺しでも人攫いでも何でもする犯罪集団のようなものだった。

事の発端はいつものように稼いだ金で昼間から酒場で酒を煽っていると黒いローブを着た男が話しかけてきた。男は港町から王都に向かう馬車の中にいる人物を殺してほしいというものだった。ローブの男は標的がどんな人物か言わなかったが護衛の騎士は少数で特に問題もなさそうだった。男は出された大金に目がくらんだ事もあり、二つ返事で引き受けた。相手が騎士でも数さえ揃えて挑めばうまくいく自信があった。

計画実行の日、傭兵仲間を１０人集め港町の近くで待ち伏せる。ローブの男の言っていた時間通りに町から馬車と騎士を乗せた馬５頭が出発するのを確認できた。人気のなくなるのを待って襲撃。騎士の数人に手傷を負わせ、逃げる馬車を追いかけて馬を潰して足止めさせる。後は手傷を負った者を含む騎士達を始末して標的を殺せば任務完了。あまりに上手く事が進み思わず顔が緩みかけた直後だった。突然騎士とにらみ合っていた仲間の一人が吹き飛ぶのを視界の隅に捉える。周りの仲間も騎士達も止まってそちらを見てしまう。吹き飛んだ男は気を失ってしまったようだ。次の瞬間他の仲間が足

を斬られ倒れ、２人が矢に射抜かれる。そこで騎士達に救援が来たことに気付く。それに乗じて騎士達の士気も高まっている様だった。さらに救援に来た男の怒声で仲間達が怯んでいる事に気付いた男はすぐ撤退を仲間達に命じた。怪我をした仲間を馬に乗せ一目散に逃げ出す。そしてこの街まで戻ってきて今に至る。

「これじゃ金にならねぇ、無駄働きじゃねぇか！」
「ボルザよ、怪我した奴らの治療費どうするよ？」

仲間の一人がそう聞くとボルザと呼ばれた男は仲間を怒鳴りつける。

「そんなもんはそいつらの自腹に決まってんだろ！　そこまで面倒見るつもりはねぇ！」

怒鳴りつけられた仲間もそれ以上は何も言わなかった。仲間と言っても金の繋がりしかなかったからこれ以上心配する気もなかった。

「まぁまぁ、そんなに苛立つ事はありませんよ。」

ボルザの後ろから声がかかる。ローブを着た男が立っていた。フードを深くかぶり顔は確認できなかったが３０～４０歳ほどの細身の男だった。

「あ、あんたか・・・わりぃ、依頼は失敗しちまった。」
「えぇ、離れたところから見てましたから知ってます。」

ローブの男は相変わらず温和な口調で話す。まるで失敗を気にしていないようでボルザはホッ安心したようだ。

「み、見てたのかよ・・・。なぁ、もう一回チャンスをくれねぇか？　次こそはうまくやるぜ。」

金が欲しいボルザはダメ元で聞いてみると、ローブの男はニヤリと笑い答えた。

「そう言ってくれると助かります。こちらもこれで諦めるわけにはいかないのでね。」

「おお、ありがてぇ。次はもっと準備をして挑むぜ。」

「なら人数をもっと揃えてもらえると。騎士達は村に滞在しているようです。数日は滞在しているようなのでその間に始末して下さい。村ごと潰してもらっても構いません。」

「へへっ。わかったぜ人数集めて村ごとだな。」

ボルザは下卑た笑みを浮かべるとすぐにその場に居た仲間に人を集めるように命令する。

（使えない馬鹿共だが扱いは楽で助かる。次こそは成功してもらわないとな・・・。）

ローブの男はそんな事を思いながら目の前の男達を見ていた。

［オルタスの家］

「それでは改めまして、オレがこの村の村長のオルタス・アメジス

トと申します。こちらは妻のクラウです。後ろに立っているのが息子のハジメ、執事のラウスペムス、そして村の警備主任をしているドルガンです。」

オルタスとクラウは座った状態で頭を下げる。他の3人もそれに合わせて一礼する。テーブルを囲って一方はオルタスとクラウが座り、後ろにはハジメとドルガンとラウが立っていた。反対側にはシャワルが座り、騎士が1人後ろにいた。怪我した騎士は村で治療を受け、残りの騎士は家の前で待機していた。

「オルタス殿にクラウ殿ですね。私はシャワル・グァロキフス。後ろに立つのはヨークソンと言います。」

紹介されたヨークソンは2人に向かって一礼すると「少しよろしいでしょうか。」と喋りだす。

「オルタス殿達は我らを助けてくれた恩人、大変感謝はしておりますが、村長という身分で王子と同じ席で話をするというのはいかがでしょうか。」

ヨークソンは一国の王子と村長が同じ席で対等に話をするのが気に入らなかったらしい。身分で言えば王族と平民なのだからそれは当然だった。だがオルタスは全く気にしてなかった。

「あぁ、それは済まない事をしたね。どうも長生きしてるとそういう事に疎くなっていけない。」

「は？」

オルタスの言葉にヨークソンは首を傾げる。オルタスが自分と5歳ほどしか変わらないように見えるからだった。そんなヨークソン

を余所にシャワルは話を始める。

「ヨークソンが大変失礼な事を言いました。気にしないで下さい。ところで、オルタス殿はもしや『軍団(レギオン)』のオルタス殿ですか？」

「うわ、懐かしい名前を知っているね。やっぱりアイツの子孫だからかな？」

驚いたオルタスは思わずいつもの口調に戻る。ヨークソンはそれに対して口調を強めて注意する。

「オルタス殿！　王子に向かって無礼な口は慎んでいただきたい！」

それに対してシャワルが口を開く。

「無礼なのはヨークソンの方です。こちらの方は我々どころか我が国の恩人ですよ！」

それを聞いてヨークソンの頭に疑問符が浮かぶ。グァロキフス国の恩人なら自分が知らないはずはないと思ったからだった。それを見たシャワルはオルタスについて説明する。

「オルタス殿は初代国王オルバスタ様と共にこの大陸を平定したまさにこの国の大恩人。この方がいなければグァロキフスはなかったと言っても過言ではありません。」

「いやいや、それは言い過ぎだよ。そこまで大した事してないよ？」

オルタスは照れながら否定する。それを笑顔で見ているクラウと説明したシャワルとラウ以外は一様に驚きの表情だった。思考停止からいち早く戻ったのはハジメとドルガンだった。２人は魔人のオルタスが３００年生きている事を知っていたから「そんな事をして

いても不思議じゃないか」と納得していた。それから間を置いてやっとヨークソンも復帰して声を荒げる。

「そんなバカな！　２５０年以上前の事ですよ！？　生きてるわけないじゃないですか！！」

ヨークソンも『軍団（レギオン）』と呼ばれた英雄がいるという事は知っていた。しかしそれはもはやお伽噺の世界のような昔話だったのでその人物が目の前にいるとは理解できなかった。

「まぁ、普通はそうだよね。王子はよくそう思ったね？」

「はい、先祖代々語り継がれていた事で私も子供の頃に父から聞かされました。どうにもならないほど困った事があれば『軍団（レギオン）』のオルタス・アメジストという人を頼れ。これは王族の中でも王にしか伝えられない秘密ですので。」

「うわ、オルバスタのやつ厄介事全部オレに押し付けて逝ったのか！？」

「オルバスタさんらしいですね。」

呆れるオルタスと笑うクラウ。その2人を見て微笑むシャワルだったが真面目な顔になりヨークソンを見る。

「そういう訳なので今聞いた事は他言無用に願います。わかりましたか？。」

「は、はい！」

狼狽していたヨークソンはシャワルにそう言われすぐ気を引きしめ直す。今聞いた事は王のみにしか伝えられない国家機密より重要事項だったので思わず聞いてしまったヨークソンは冷や汗をダラダラ流している。元々仕事に対しては徹底していたのでヨークソンを

信頼してるシャワルは特に心配していなかったのだが。

「オレの話はこの辺にしておいて、襲撃の話をしようか。」

「はい。私達は父の代わりに港町で行われた新しい船の進水式に出席して、それも無事に終わり王都に帰る途中でした。」

「あまり大げさな護衛は必要ないと王子の要望でしたので少数精鋭でお守りしていました。街道さえ通れば特に危険な事もなかったのと、行きに何もなかったので油断していたのかもしれません。まさか盗賊の集団がいるとは思いもしませんでしたが。」

シャワルとヨークソンが襲撃までの経緯を教える。ここ数十年は平穏そのもので盗賊などの犯罪者も数が減っていた。その盗賊も農民や商人などを襲うだけで騎士の集団に挑む者は皆無と言ってよかった。そこでそれまで黙っていたドルガンが口を開く。

「オレが思うにアイツ等は盗賊じゃないと思います。どちらかというと傭兵とかそんな感じでした。」

ドルガンは自分が感じた事を話した。それを聞いたオルタスが考える。

「という事は、誰かに雇われて王子達を襲ったって考えた方がいいのかもな。」

「誰かの指図で王子が狙われたのですが！？」

オルタスの予想にヨークソンが驚く。だがドルガンの言うとおり相手が傭兵なら裏で指示している人物がいる可能性が高い。

「うーん、その傭兵達これで諦めると思うかい？」

「さらに人数増やして襲ってくるかもしれませんね。」

オルタスの疑問にドルガンが答える。それを聞いたオルタスはシャワルとヨークソンに提案をする。

「とりあえず騎士達の怪我が治るまで村にいるといい。帰る時は王都まで数人付き添いを付けようか。あと滞在中に襲ってきたら迎撃って感じかな。」

「それでは村に迷惑がかかります。そこまでしてもらう訳には。」

「あ～大丈夫大丈夫、トナイ達から聞いた話じゃ大した事なさそうだし、村に来たらオレが歓迎すればいいしね。」

そう言うとオルタスはニコリと笑った。シャワルとヨークソンは「はぁ。」と答えるしかなかった。

王子一行は2日程村に滞在する事になった。村の空き家を使ってもらいモルヒラ、ヒルエの2人が怪我をした騎士達の面倒を看る事になった。シャワルは村人の生活が珍しく、ヨークソンを引き連れて村を色々見て回っていた。道場にも来て練習風景を見ていた。ヒルナンは誰とも打ち解ける性格と憧れの騎士が目の前にいるという事ですぐヨークソンや他の騎士と仲良くなり稽古をつけてもらったり、騎士について色々聞いている様だった。弓の練習をするエルレアやヨークソンと稽古をするヒルナンを道場の端で座って見ているとシャワルが隣に座り話しかけてきた。

「ハジメ・・・君でよかったかな？」

「ええ、ハジメで合ってますシャワル様」

「そんなに畏まらないでいいよ。歳も同じくらいだしね。普段の話

し方で構わないよ。」
「はぁ。・・・・・・じゃあ、オレは呼び捨てで全然いいから。」
「ありがとう、同い年の子供と話す事が無くてね。そういうのに憧れてたりしたんだ。僕の事も呼び捨てで頼むよ。」

（いや、それはさすがにマズイだろ。）

断ろうと思ったが、期待する目をしているシャワルを見て思い切ってそうする事にした。

「じゃあ、シャワルは普段遊んだりする友達少ないのか？」
「少ないというより居ない・・・かな。城の中は大人ばかりだからね。遊ぶという事もほとんどないよ。」

苦笑いをするシャワル。村の子供達が集まり楽しそうに遊んでる（本当は訓練をしているのだが）姿が羨ましかった様だった。そう考えたハジメは立ち上がる。シャワルは「どうしたのだろう」とハジメを見上げる。

「遊ぶってわけじゃないけど一緒に訓練するか？」
「え？　ああ！お願いするよ。」

嬉しかったのか素早く立ち上がってハジメの後を付いて行く。練習をしているヒルナンとヨークソンにもシャワルが参加する事を伝えた。ヨークソンは止めようとしたが、シャワルに説得されて「怪我をしない程度にする」と約束させることで許可を出した。ハジメがシャワルを呼び捨てな上に敬語ではなかった事を注意しようとしたが、シャワルが年相応の笑顔で嬉しそうにハジメ達と話しているのを見て注意する事を止めた。常に大人達に囲まれていつも一人でいるシャワルが寂しい思いをしていると知っていたからだった。ち

なみにヒルナン達もハジメが話すのを聞いてシャワルに対して普段の口調になっていた。

「んで、シャワルって普段訓練とかしてんのか？」

ヒルナンが疑問を口にする。王族の子供が普段どんな事をしているのか知らなかったからだ。

「勉強と剣の稽古。あと魔法の勉強もしているよ。」

「おお！　魔法使えんのか。やってる事もハジメみたいだな。」

「え？　ハジメも？」

「コイツはさらに体術もやってるからなぁ。ホント何になりたいんだって感じだよな。」

「うるさいよ、色々やっておくと後々生きてくるんだぞ。たとえばお前の場合勉強とかな。」

「おっさん臭い事言うな。あとそれはオレが馬鹿だと言いたいのか？」

「じゃなきゃ勉強しろなんて言わないだろ？」

いつも通りのケンカが始まるとシャワルはオロオロし始める。だがエルレアに「これいつもの事だから。」と教えてもらい安堵する。一通り終わり、ヒルナンはシャワルとの会話を再開する。

「そうだ、魔法見せてくれよ。ハジメ以外の魔法見たことないんだ。」

「うん、いいよ。僕は雷魔法しかできないのだけど。」

「おお、それでいいよ。見たことないし。」

ヒルナンは嬉しそうに言った。「じゃあ。」と少し離れた場所にあった岩に向かって構えると、ハジメ達はシャワルから少し離れた。

それを確認してシャワルは呪文の詠唱を始める。呪文は普段の言葉とは違う言語で、精霊と話すための言語だとハジメはオルタスから教わっていた。前に出していた右手にバチバチと電気が集まっていく。

「雷(いかずち)の矢！」

そう叫ぶと手から岩に向かって雷が飛んで行った。落雷したような音がして岩には黒い焦げ跡が残っていた。

「うおおおお！　すげぇぇぇ！！」

ヒルナンは拍手しながら驚いてた。ハジメ達も拍手しているのを見てシャワルは恥ずかしそうにしていた。

「そうだ、ハジメの魔法も見せてくれないかい？」

「え、オレ？　まぁいいけど。」

シャワルと代わってハジメが構える。

（うーん、そうだな。とりあえず火でいいかな。）

右手にグッと力を込めて魔力を集める。ゆっくり手を緩め火が回転するイメージを具現化する。手の中に野球ボールくらいの火の玉ができる。そのまま野球の投球フォームに移るハジメ。ヒルナンとエルレアは何度も見ている普通の事だったがシャワルとヨークソンは目が点になっている。そんな事に気付かずそのまま岩に向かって火の玉を投げつける。真っ直ぐ岩に向かって行き着弾、小さな爆発を起こす。

「ふむ、まぁこんなもんかな。」

そう言って振り返るとシャワルがこちらに向かってすごい勢いで来る。思わずハジメは後退りしてしまった。

「今のは！？　あんな魔法見たことないよ！！」
「え、あ～・・・今のは『魔人魔法』だよ。」
「『魔人魔法』？　そんなものがあるのか。」
「魔人だけが使える魔法・・・だな。」
「魔人・・・そうか、君はオルタス殿の子だったね・・・。」

シャワルはふむふむと納得している。その後ろからヨークソンが来て話しかけてくる。

「詠唱せずにどうやって精霊に力を借りるのだ？」
「ああ、それは魔力をそのまま自分で火に変えてるんですよ。」

そう言って掌に小さな火を出す。それを見て呆気にとられるシャワルとヨークソン。それを見て「しまった」とハジメは後悔した。『魔人魔法』は普通の人から見ればありえない魔法で色々面倒になりそうだからできるだけ隠しておこうと昔思っていた事を忘れていた。普段村から出ることなく村人は『魔人魔法』を知っていたから失念していたのだった。

「そんな事より剣の練習しようぜ！」

ヒルナンがそう言ってシャワルとヨークソンを誘ったので魔法の話はそこで終わった。ハジメは「ナイスヒルナン！」と称えた。もちろん口には出さず心の中で。

次の日オルタスは用事が出来たので魔法の練習は休みになった。仕方がないので道場で自主練をして休んでいるとシャワルが話しかけて来た。ヨークソンは少し離れたところでヒルナンと何か話をしていた。

「やあ、今日も練習かい？」
「ああ、毎日なにかしらやってるからな。体動かしてないとどうも調子でなくて。」
「なるほどね。そう言えばハジメはなにか目指してるものはあるのかい？　ヒルナンは騎士になりたいそうだし、エルレアは学者になりたいそうだね。トナイやレットンも狩人になるって聞いたよ。」
「ん～何かになりたいってわけではないけど、世界を旅してみたいってのはあるかな。」
「へぇ、世界か。それは楽しそうだ。」
「だろ？」

シャワルの反応にハジメも笑顔になる。するとシャワルが質問をしてきた。

「学園に通う気はないのかい？」
「学園？」

突然の出たシャワルの話に首を傾げる。

「王都に学園があるんだ。国中から騎士や魔法使い、学者などになりたい子供が集まるんだよ。」
「へぇ、それはヒルナンやエルレアにはピッタリな場所だな。」

「うん、それで君も魔法をもっと勉強してみる気はないかい？　君くらい才能があるなら是非行くべきだと僕は思うんだ。将来何になるかは君の自由だし、学園に行くかどうかも君次第だけどね。」
「うーん。まぁ考えとくよ。」

突然の誘いに曖昧な返事しか返せないハジメ。「わかった。」とシャワルは笑顔で頷く。興味が無いわけではないが学園に通うのもタダではないだろうし、両親に相談してみようと考えた。それと昨日の事でシャワルにお願いをしておく事思い出し口を開く。

「そういえばさ、『魔人魔法』の事なんだけど・・・。」
「うん、それがどうかしたかい？」
「オレが魔人で『魔人魔法』が使えるって事は秘密にしておいてくれないかな。村の人はもう知ってるから気にしてなかったけど、外の人からしたら珍しいものなんだろ？　色々と面倒な事になる気がするからこれからは隠しておこうと思って。」
「なるほど・・・。うん、わかった。ヨークソンにもそう言っておこう。そもそもオルタス殿の事も王しか知らないような事だしね。ハジメの事も踏まえて他言無用ということにしておくよ。それでいいかい？」
「ああ、助かる。ありがとうシャワル。」

シャワルの笑顔にハジメも笑顔で返す。それからしばらく雑談をしていると村の入り口から大声が聞こえてきた。

「盗賊がきたぞーーーーー！！！」

その声にハジメ達やシャワル、ヨークソン達騎士も一斉に入口に走って行く。入口に着くと遠くの方から数十頭の群れがこちらに走ってくるのが見えた。

「なんだ、あの数は・・・あんな盗賊の集団みたことないぞ・・・。」

ヨークソンは向かってくる集団を見て冷や汗を流す。４０人近くはいるように見えた。このまま村に攻め込まれたら村は壊滅してしまうだろう。

「うわー、この国であんな盗賊集団いないのにね。あれじゃ私達は盗賊じゃないですって言ってるようなものだね。」

後ろからの呑気な声にハジメ達が振り返るとオルタスがにこやかに向かってくる盗賊を見ていた。この国は治安がよく盗賊もそれほど多くはない。ましてやあれほどの盗賊団が野放しにされている訳もなかった。

「そんな呑気な事言ってる場合ですか！」

思わずヨークソンが怒鳴るが、オルタスは「まぁまぁ。」と宥めて、連れてきていたクロフレイアに跨ると一人で集団に向かって歩き出した。

「ちょ、ちょっと何する気ですか！？」

慌てたヨークソンがオルタスを引き留める。オルタスは立ち止まると笑顔で言葉を返す。

「いや、村に入って来られても迷惑だから外でやっつけておこうかなってね。」

「は？　いやいや、１人でどうなるものでもないでしょう！？」

「あ～、逆に1人じゃないと巻き添えになるから来ないようにしてもらえると助かるかな。」
「え・・・・・・。」

ヨークソンは完全に思考が止まってしまう。それを見てオルタスは再び歩を進める。

「お、王子・・・大丈夫なのでしょうか。」

復活したときにはオルタスは行ってしまっていたので隣にいた王子に話しかける。

「オルタス殿が大丈夫だと言うのなら信じるしかありませんね。」
「はぁ・・・。」

2人と騎士達は不安の入り混じった真剣な顔でオルタスを見つめていた。ハジメを含む村の子供達もオルタスを信じて見守るしかできなかった。村の大人達だけは安心しきっている顔を皆浮かべていた。

第8話　王子達との交流と襲撃（後書き）

ここまで書いてきましたが、主人公が特に何もしてないことに気が付いた。ま、まぁ子供がそんなに活躍するのも変ですよね。どこかの少年探偵じゃないんだから。
そんなわけで次回はオルタス無双です。

第9話　村長オルタスの交渉術とシャワル達との別れ

「あの村か？」
「ああ、間違いねぇ。この辺には村なんてここしかないって話だしな。」

ボルザの問いに仲間の一人が答える。森に隣接する村の規模は小さく、ボルザ達が集めた数で十分依頼をこなせる様に見えた。

「よし、行くぞ！　テメェ等！！」

手にした剣を掲げ、ボルザがそう叫ぶと「ウォォォォォォ！！！」と仲間達が応え、それぞれが武器を手に取り走り出す。そしてその勢いで村への進攻を開始する。先頭を走るボルザも今度こそ成功させようと剣を持つ手に力が入る。

しかし、村から馬に乗った1人の男がこちらに向かって歩いて来るのに気付き、ボルザ達は速度を落としてしまう。「命乞いか？」とボルザは考えた。依頼としては標的さえ殺せばよかったので村を襲う必要はない。だがこの地点でボルザ達は村を襲ってすべてを奪ってしまおうと考えていた。

（どうせ「標的達と引き換えに自分達は助けてくれ」と交渉してくるのだろう。交渉してきたらそれに応えるフリをして村に近づき襲えばさらに楽に仕事ができるな。）

とボルザは考え、男が来るのを待つ事にした。男が来るまでに仲間達にもその事を伝えたので仲間たちはニヤリと笑いボルザに従った。

男がボルザ達の前に来て男の表情が分かるとボルザ達の顔に疑問

が浮かんだ。今まさに命の危機だというのに男はニコニコと笑顔でこちらを見ていた。男は馬から降りるとボルザ達に話しかけた。

「いや～、こんな所までよく来たね。周りに何もない所だから迷わなかったかい？　あ、それとも場所はもう知っていたのかな？」

「な、なんだテメェ！何者だ！！」

「あ、これは失礼したね。オレはあの村の村長でオルタス・アメジストって言うんだ。そんな事よりちょっと君達にお願いがあってね。」

（平然としてるが結局命乞いか。）

ニヤリと顔を歪めかけたボルザだが、次のオルタスの言葉に表情が固まってしまう。

「悪いんだけど彼らの事は諦めてくれないかな？」

「は？」

ボルザを含む全員がポカンと同じ表情を浮かべる。そんな中ボルザがいち早く立ち直り怒声をあげる。

「ふ、ふざけてんのかテメェ！！　諦める訳ねぇだろ！！」

その声に我に返った仲間達も一斉にオルタスを殺気の籠った目で睨む。それにまったく臆することなくオルタスは「まいったな」という顔をする。

「うーん、そうなると君達を皆殺しにしなきゃいけなくなるのだけど・・・。」

「皆殺しだと？　テメェ頭おかしいんじゃねぇのか？　この状況で

なんでそうなるんだ！！　もういい！　テメェ殺して村も潰してやるよ！！」

完全に交渉が決裂した事にオルタスは残念そうな顔を浮かべる。だがそれは一瞬で、すぐ普段の表情に戻る。

「それじゃ仕方がないね。村を危険に晒すわけにいかないからね。でも馬に罪はないし・・・クロフレイア頼むよ。」

「ヒヒィン。」

クロフレイアは返事をするように鳴くとボルザ達が乗っている馬達を睨む。すると馬達は急に落ち着かなくなる。

「な、なんだ！？　どうした！！」

ボルザ達も何事かと馬を宥めようとするが全く言う事を聞く気配がない。そしてクロフレイアが前足で地面を強く叩くと馬達は一斉に暴れだし、乗っていたボルザ達を振り落して逃げて行ってしまった。受け身も取れず地面に落下する男達にオルタスは申し訳ないように言った。

「馬はさすがに可哀そうだからね。逃げてもらったよ。悪いね。」

その声を聴いてボルザ達は殺気をさらに膨らませオルタスを睨みながら立ち上がる。すぐにでも斬りかかるという感じだった。

「テメェ、ぜってぇ殺してやる！！」

「そっか、みんな殺る気マンマンだね。あ、でも途中で逃げようとされると困るし、村の連中には刺激が強いだろうからもうちょっと待ってね。クロフレイア。」

「ヒヒィィィン！」

クロフレイアは嘶くとクロフレイアの周りに黒い炎が上がる。炎は２ｍほどの壁になりオルタス達とボルザ達を囲って外からは見えないようになった。それにボルザ達は驚き狼狽える。

「テ、テメェ！　なにしやがった！？」

「この炎は熱くないから安心していいよ。でも触れると燃えるから。」

「ふ、ふざけ・・・や・が・・・。」

叫ぼうとしたボルザの声が途中で止まってしまった。ボルザはオルタスの目を見てしまった。紫色に輝く目を。するとオルタスの足元に黒い影ができていた。丸い円形をした影はどんどん広がり直径１０ｍ程に広がる。影の中から人の形をした黒い塊が次々出てきた。全身黒一色で表情などはなかったが手にはそれぞれ武器を持ち、形だけだが鎧を着ているように見えた。それが４０体ほど出てきたところでオルタスは話しかける。ボルザ達は完全に思考が止まりまったく動けなかった。だが次のオルタスの言葉で表情は恐怖に染まる。

「殺そうとしているところ悪いけどここからは一方的な虐殺だ。君達は王族を殺そうとしたんだ。誰一人生かしては置けない。生かして捕まえてもどうせ死罪だしね。」

言い終わるとオルタスの周りにいた黒い人達が次々ボルザ達に襲いかかった。ボルザ達は応戦しようとしたが、黒い塊のどこに攻撃してもすべて弾かれ、向こうからの攻撃を防ぐしかできなかった。終わることのない怒涛の攻撃を防ぎきれるはずもなく、オルタスの言った通り一方的な虐殺になっていく。攻撃が効かずそのまま切り捨てられる者、逃げようとして黒い炎に焼かれる者、中には武器を

捨て命乞いする者もいたが、黒い人はそれを聞く事もせず剣を突き刺す。阿鼻叫喚の中、黒い人は淡々と殺していく。そんな中ボルザは離れて立っているオルタスに気付きオルタスに向かって走り出す。

「死ねぇぇぇぇ！！！！」

ボルザが剣を振り下ろす瞬間ボルザの体が黒い炎に包まれる。クロフレイアがボルザを睨んでいた。

「グギャァァァァァ！！」

黒い炎に包まれ絶叫するボルザ。すると後ろからドスッドスッと衝撃が伝わる。黒い人2人がボルザの背中に剣を突き刺していた。絶叫も止まり、血を吐きながらそのまま崩れ落ちるボルザ。周りを見るともう黒い人以外誰も立ってはいなかった。それを確認するとオルタスは「ふう。」と息を吐く。それと同時に黒い人は霧のように消えてしまった。紫色に輝いていた目も黒色に戻っていた。

「さてと、後はこの死体だな。このまま残すのも不味いし燃やしておいてくれるかい？」

「ヒヒィン。」

すると、死体がすべて黒い炎に包まれた。着ていた鎧も持っていた武器もすべて消えてなくなった。囲っていた炎の壁も死体が無くなるのと同時に消え、残ったのはオルタスとクロフレイアだけだった。オルタスが周りを見渡すと遠くの方で馬に乗った人影が走って行くのが見えた。

「あれが依頼人かな・・・今から追うのは無理かな。またすぐ襲うって事はたぶんないか。さて、戻ろうかクロフレイア。」

そう言うとクロフレイアに乗って村に戻って行った。村では様々な声に迎えられたが歓喜の声（主に村人）に笑顔で答え、驚嘆の声（主に騎士達）に笑って流した。

次の日「村にこれ以上迷惑をかけたくない。」との事でシャワル達は王都に戻る事になった。怪我をした騎士は動くのに支障はなかったが、念の為ドルガンとラウが付いて行く事になった。

「それではお世話になりました。皆さん。」
「いやいや、気にする程の事じゃないよ。気を付けてね。」
「気を付けてくださいね。」

シャワルがお辞儀をするのに対してオルタスとクラウが返す。

「今回は私達騎士にも落ち度がございました。二度とこんな失態を犯さぬ様さらに精進を重ねます。本当にありがとうございました。」

ヨークソン達騎士の言葉に笑って答えるオルタス。ヨークソンとオルタスが話をしているとシャワルがハジメの方へ来る。

「ハジメ昨日言ってた事覚えてるかい？」
「ん？ああ、学園の事か？」
「ああ、是非考えておいてくれ。」
「わかったよ。でも期待するなよ？」
「わかった。じゃあハジメ、元気で。」
「ああ、シャワルもな。」

シャワルが馬車に乗り窓から顔を出したのでハジメや村の子供達は笑顔で手を振る。シャワルも嬉しそうに手を振って応えた。村人達が見送る中、馬車は王都に向かって走って行った。

見送りも終わり、いつもの生活に戻る。家に帰りリビングでお茶を飲んでいる両親に話しかける。

「あの、ちょっといいですか？」
「ん？　なんだいハジメ。」

オルタスとクラウがハジメを見る。ハジメはイスに座り話を切り出す。

「あの・・・シャワルから王都の学園に行ってみないか？って誘われて。」
「ふむ、でハジメは行きたいのかい？」
「興味はありますが、学費もかかると思うし、父上と母上に迷惑がかかるんじゃないかと・・・。」

そう言うとオルタスとクラウは笑い出す。ハジメは何事かと2人を見つめる。それに気付いてオルタスが謝る。

「ゴメンゴメン。あまりに大人な事を言うからつい笑っちゃったよ。あと学園の事はシャワル王子からも相談を受けたんだ。」
「え？シャワルから？」
「うん、ハジメは魔法の才能がある。学園で学べばもっと伸びるは

ずだってね。もしお金の問題があるなら奨学金制度もある。と、真剣だったよ。」
「そんなこと言ってたんですか・・・。」
「あとヒルナンとエルレアが学園に行きたがってる事もね。」
「そうですか。」
「オレ達としてはハジメが行きたいなら応援するよ。お金に関しては全然気にしないでいいよ。ハジメの学費払うくらい全然問題ないからね。」
「ヒルナンとエルレアは？奨学金制度を使うんですか？」

オルタスの話でハジメは大丈夫だというのはわかったが、2人は村の普通の家庭の子供。王都の学園の学費を払える余裕などあるわけがなかった。

「2人は奨学金制度を使うみたいだね。オレが払うって案もあったのだけど奨学金の方が頑張れる気がするって言うからそれ以上は何も言わなかったよ。もし、奨学金が受けれなかったらオレが出すつもりだけどね。」

それを聞いてハジメは自分も奨学金制度にするべきじゃないのかと考えた。それが顔に出ていたのかオルタスが真剣な顔で話しかける。

「もし、自分だけ学費を出してもらえるのが申し訳なくて2人に合わせて奨学金にしようと思ってるならやめときなよ？　それは何の意味もない事だし2人も喜ばない。親が子供の学費を出せるのだからそれは出さなきゃね。親は子供の望む事の力になりたいって思うものなんだ。何より学費が奨学金だろうと親のお金だろうと頑張らなきゃいけない事に変わりはないんだからね。」
「・・・・・・はい。」

オルタスの言葉を聞いてハジメは自分が両親や友人の事をちゃんと考えてないと気付いた。両親は自分の事をすごく考えてくれて、遠慮なんかしてほしくない。友人達はそれぞれが夢の為に一生懸命頑張っている。自分が恵まれているからと言って2人に合わせるという事自体失礼な事だと気付いた。反省しているハジメの顔を見て微笑みながら話を続けるオルタス。

「うん、それじゃ学園に行くって事で話を進めようかな。2人にも話しておかなきゃね。」
「はい！　よろしくお願いします！」
「ああ！　任せておいてくれ。ハジメもがんばらなきゃね！」
「がんばってねハジメ。」
「はい！　母上。」

笑顔で応援する両親にハジメも元気よく笑顔で返した。

［ある屋敷の一室］

「で、結局失敗したと？」
「も、申し訳ありません。」

イスに座っている男が話し掛ける。見るからに高価な服を身に纏った男の怒りの混じった声にローブを着た男は謝る。傭兵達に襲撃を依頼した男だった。今はフードは被っておらず、ギョロリとした

目の細身の男が必死に頭を下げていた。それに対して男は溜息を吐く。

「せっかくの機会を無駄にしおって。しかも城で聞いた話によると盗賊団の襲撃という偽装もばれているそうではないか。シャワル達も当分警戒するだろうな。」

「お、恐らくはそうなるかと・・・・。」

「チッ、使えん傭兵などに頼るのではなかった！　そんな奴らを選んだ貴様も含めてな！！」

「申し訳ございません！！」

男の怒声にローブの男は只々謝るだけだった。

「しばらく様子を見ているしかないか・・・・。」

怒りを浮かべた顔のまま窓をの外を見る。男は窓から見える城をずっと睨み続けていた。

第9話　村長オルタスの交渉術とシャワル達との別れ（後書き）

あけましておめでとうございます。
新年一発目で残酷描写が来ました。たぶん残酷描写です。オルタスさんは結構容赦ない人です。怖いですね。というか交渉してないですね。怖いですね。
幼少期編はこれで終わりの予定です。短い昔話を入れて新章に入っていこうかなと思います。

昔話　王の頼みとオルタスの条件

［グァロキフス城　王の私室］

窓際にある椅子に腰を下ろしている国王オルバスタは窓の外を見る。城の中も城下町も活気に溢れていた。大陸の平定して数十年、やっと国らしい姿になってきた。長かった戦乱も終わり人々の顔も生き生きとしていた。この景色こそがオルバスタの人生であり誇りだった。そんな景色を眺めているとドアをノックする音が聞こえる。

「オルバスタ様、お客様がお見えになりました。」

「うむ、通せ。」

イスから立ち上がりそう返すと扉が開き、使用人の後ろから３０歳ほどの男女が入ってくる。案内をしてきた使用人はお辞儀をして部屋を出る。部屋にはオルバスタと男女の３人だけになった。

「やあ！　オルバスタ、元気そうだね！！」

「お久しぶりです。オルバスタさん」

男は笑顔で手を上げて挨拶をし、女はその後ろから丁寧に頭を下げる。その２人を見てオルバスタも笑顔で答える。

「ふふ、オルタスにクラウ、相変わらずだな２人とも。本当に・・・４０年前と何一つ変わってないな。」

「いやいや、オルバスタも相変わらず元気そうで安心したよ。」

「私はもう６０をとっくに過ぎた年寄さ。同い年とは誰も信じてく

れんだろうな。」

オルバスタは苦笑を浮かべる。「まぁ、座ってくれ。」とオルバスタは2人をイスへ促し、自分もテーブルを挟んだ向かいのイスに腰を掛ける。

「で、わざわざ話ってなんなんだい？」

「ああ、今日はオルタスに頼み事をしたいと思い呼んだのだ。」

「頼み事？　先に言っておくけど国に仕えろとかは無しだぞ？　オレ達が手伝うのは平定するまでって約束だったからね。その後の事は国王であるオルバスタと臣下のみんなの仕事だろ？　オレは今の村での生活をやめる気はないよ。」

「わかっている。ただ私が死んだ後の事で頼みたいのだ。」

「死んだ後？」

「もし私の死後、私の子孫達に何かあったら助けてやってほしい。これは王としてでは無く、友としての頼みだ。」

オルバスタの心配は王となれば命を狙われる事があるという事だった。今はその心配はなくても代を重ねれば王の座を狙う者が必ず出てくると考えていた。戦乱の時代を生きたオルバスタはそんな話をいくつも知っている。その事を話すとオルタスは少し考えた後に口を開く。

「まぁ、助けるくらいはいいけど期待はするなよ？　村に居て気付かない事だってあるんだから。あと・・・」

オルタスはさらに条件を付けた。

「そいつが助ける価値もないようなヤツだったらオレは見捨てるから。それはお前の子孫でもだ。」

「ああ、それで構わない。君が見捨てるようなヤツに国を任せられんしな。」

そこまで話すと笑顔に戻り他愛もない雑談になった。ずっと黙って聞いていたクラウもそれには参加して３人の話は大いに盛り上がった。話に夢中になるオルバスタは４０年前に戻ったように生き生きとした表情だった。

［現在　オルタスの家］

「まさかあの時の約束が今更出てくるとはねぇ。」

リビングで寛ぎながら呟くオルタスにクラウは笑顔で応え、そして気になった事を聞く。

「もしシャワル王子が王に相応しくなかったら見捨てました？」
「まぁ、そういう約束だったからね。でも彼はいい王になると思うよ。賢そうだし真面目なところはオルバスタにも似てると思う。さすがアイツの子孫だね。助けた理由は他にもあるけど・・・」
「他に？」
「ハジメの友達を見捨てるわけにもいかないしね。」
「ふふ、そうですね。」

オルタスの答えに微笑むクラウ。オルタスはそんなクラウを見て照れたのか頭を掻きながら笑った。

昔話　王の頼みとオルタスの条件　（後書き）

短い昔話ですが王とオルタスの話を入れたかったので。
次回から新章にはいると思います。

第１０話　国立バスティア学園初等部入学試験

シャワル達の事件の後、ハジメ、ヒルナン、エルレアの３人は半年後にある王都の学園入学試験に向けて勉強をしていた。３人の受験手続はオルタスがしてくれていた。試験を受けられるのは１０歳からで３人とも今年１０歳になるので丁度良かった。

試験内容は筆記試験と選択科目別の試験だった。選択科目は騎士、魔法、学術で分かれており、それぞれ剣術試験、魔法試験、研究発表といった内容だった。筆記試験は街にいる１０歳位の子供が勉強するレベルだったがハジメとエルレアは数年前にやっていた事だったのでまったく問題はなかった。ヒルナンは今までまったく勉強をしていなかったがクラウ、ハジメ、エルレアのスパルタ教育でなんとかなりそうだった。

選択科目の試験もシャワル達を送って王都に行った際に試験のレベルを調べていたラウからお墨付きをもらっていたのでヒルナンとハジメは今まで通りの訓練をしていた。研究発表があるエルレアは発表内容を決めたり、色々調べていた物を纏めていたりしていた。ちなみにラウは王都の本屋で『学園入試の傾向と対策』という本を見つけたが、内容がハジメ達がとっくに習得していた事だったので買わなかった。

ハジメはこの間に『魔人魔法』を１つ作っていた。名前は＞眼色（カラ）偽装（コン）＜。眼の表面に膜を作り、魔法使用時に輝く眼を隠す効果があった。前世にあったカラーコンタクトレンズをイメージして作った魔法だった。これは無意識でも維持できるようにする為にハジメは常時この魔法を使うようにしている。魔人と気付かれず人前で魔法を使う対策だった。

あっという間に半年が過ぎ、試験2日前になった。早朝、村の入り口にハジメ達3人と保護者として付いて行くラウ、馬車を引いたクロフレイア、4人を見送る為に集まったオルタス達がいた。村から王都までは馬車で1日半で着くので朝に出発することになっていた。

「それじゃ！　みんながんばってくるんだよ。いつも通りやればまず問題ないだろうからね。」
「はい、父上。」
「まかせといてくれよ村長！」
「がんばります。」

笑顔のオルタスの言葉に3人も笑顔で答える。

「ヒルナン、初めての王都だからってはしゃぐなよ。」
「うん、ハジメとエルレアは大丈夫だろうけどヒルナンはそれが心配だね。」
「兄さん、あまり浮かれて試験失敗しないでね。」
「だ、大丈夫だって！ちゃんと試験に集中するさ。まかせておけって！」

レットン、トナイ、ヒルダから心配されるヒルナン。「たしかに浮かれそうだなコイツ」とハジメも思った。

「よし、お前等！今までの訓練通りやれば何の問題もない！ぶっ倒してこい！」
「師匠、ぶっ倒す試験じゃないです。」
「・・・ま、まぁそういう気持ちで挑めって事だな。ダッハッハッハ！！」

ハジメのツッコミに笑ってごまかすドルガン。皆も一斉に笑う。

「坊ちゃん、そろそろ出発の時間です。」

「うん、それじゃみんな馬車に乗ろう。」

3人が馬車に乗るのを確認してラウはオルタス達の方を向く。

「それでは行ってまいります。」

「ああ、気を付けて！」

進みだした馬車から手を振る3人に村人皆見えなくなるまで手を振って応えていた。

道中は特に何もなく順調に進んでいった。モンスターの襲撃があるかと思ったが周辺のモンスターより格段に強いクロフレイアを恐れて何も近づいて来なかった。おかげで野宿も安全にできた。食事もラウの＞異空間収納＜のおかげで普段通りの暖かい料理が食べられて馬車で寝る事以外特に変わらなかった。そして予定通り1日半で王都まで着くことができた。

国内では皆王都と呼んでいるがバスティアという名前があった。『王都バスティア』は4方向を壁に囲まれておりハジメ一行は北にある正門の検問の列に並んだ。ラウに聞くと出入口は正門の他に東門もあるとの事だった。そちらは貴族など身分の高い者達が主に使っている門で一般人が使う事はあまり無いとも言っていた。検問はすぐ順番が来て、入試試験を受けに来た事を伝え、受験申込み時に貰っていた受験票を見せるとすぐに通れた。

王都内は広場を中心に北と東西に大きな通りがあり南半分には城とその周りに貴族の住む地区、その周りに住民地区があった。城、貴族地区と住民地区の間には内壁と門があり門番が常に立っていた。北半分の東側は宿屋や酒場や娯楽施設などあり、西は武器屋や防具屋など様々な店が並ぶ商業地区だった。所狭しと店が並んでいて、どちらも見て回るのにかなり時間がかかりそうだった。

馬車は王都に入る前にラウが＞異空間収納＜で仕舞ってしまった。門付近に馬車を停めておく場所あるが、お金を取られるからという事だった。クロフレイアは正門近くにある馬小屋に預けることになった。預けるのはよかったが他の馬がクロフレイアを怖がって落ち着かない様子だった。当の本人は全く気にしてない様子だったが。

城下町の賑やかさにヒルナンとエルレアはキョロキョロ落ち着かない様子だった。前世の記憶があり、2人よりは人混みには慣れているハジメでも人の多さと活気の良さに圧倒されていた。村から出る事がなかった3人には見るものすべてが新鮮だった。

何度も来ているラウに必死に付いて行き、目的の宿屋に到着する。この宿屋は事前の下調べで見つけた場所だった。ラウが手に入れていた本『王都のオススメ宿屋百選』から得た情報によるものだった。

「あら、いらっしゃい。４人でいいかい？」

宿屋に入ると恰幅のいい４０歳ほどの女性が笑顔で問いかける。女性の問いにラウが答える。

「ええ、できれば1人部屋を4つ用意していただきたいのですがよろしいですか？」

「ああ、空いてるから構わないけど子供も1人づつなんて珍しいね。」

「学園の入学試験で来てまして。1人の方が集中できると思いましてね。」

「なるほど、それなら納得だね。この時期は国中から試験を受けに来るからねぇ。ウチにも何人か泊まってるよ。他の客にも騒がないように言っておくから安心しな。」
「ありがとうございます。」

丁寧にお辞儀するラウ達に「よしとくれ。」と笑顔で答える女性。後で聞いた所この宿の女将だった。
試験を受けに子供達が王都に集まるという事で宿屋で部屋が取れるか心配していたが、子供達のほとんどが保護者同伴だったので、数人泊まれる部屋を借りていて1人部屋は逆に空いていた。街も気になったが、試験を明日に控えていたので3人ともその日は宿で時間を過ごした。

次の日の朝、3人共寝坊する事無く荷物を纏めて食堂に集まる。朝食を食べ、忘れ物がないか再確認してラウと女将に見送られ宿を出た。

「よっしゃ！　それじゃやってやりますか！！」

ヒルナンが自分の緊張を解す為気合を入れる。そんなヒルナンを見て2人も緊張が少し解ける。こういう時のヒルナンはありがたいとハジメは思った。2人とも顔には出ていないが緊張していたからだった。
学園の正式名称は『国立バスティア学園』と言い、王都の西側に隣接していた。入口は王都の西門のみで学園も四方を壁に囲まれていた。学園は『初等部』『騎士科』『魔法科』『学術科』に分かれ

ていて、入学して最初に入るのは『初等部』だった。『初等部』で2年学んだ後、進級試験を受けて合格すれば『騎士科』『魔法科』『学術科』に入れる。それぞれの科でさらに専門的な事を5年学ぶというシステムになっていた。どの科に行くかは入学試験の選択科目の時に決めるので途中で変えるという生徒はほぼ皆無だった。

入学試験は3日間で行われ、1日目は筆記試験、2日目は選択科目試験、3日目には合否が出るというものだった。高校受験を経験しているハジメにはかなりスピーディに感じた。なぜそれほど早く合否を出せるかというと審査をするのが学園の教員だけでなく、各科最上級生から選抜された優等生も審査を手伝うからだとラウから教えてもらった。

学園内に入ると上級生らしい人が案内をしていて迷う事なく試験会場の初等部棟に入れた。受験票に書かれた番号の席に座り、試験開始を待つ。独特の緊張感が支配する部屋に「こういうのは初めてじゃないけど慣れる事はないな」と苦笑する。

筆記試験は1時間程で終わったので昼前には宿に戻れた。ハジメが手応えはどうだったか聞くと、エルレアは全く問題ないようでヒルナンは「な、何とかなったと思う。」と何とも言えない顔をしていた。だがヒルナンは勉強が嫌いなだけで全然できない訳ではなかったので、ハジメやエルレアもそれほど心配してはいなかった。

午後からは選択科目試験の為ハジメとヒルナンは宿の庭で軽く体を動かしたりした。エルレアは部屋で研究発表を最終チェックをしていた。

試験2日目、試験会場が選択科目毎で違ったので3人は別れ、ハジメは魔法科棟に行った。魔法試験は部屋で自分の使える魔法を試験官達に披露するというものだった。試験を受ける子供も多いので

３つの部屋で同時に試験を行っている様だった。ハジメは案内された部屋の前の長椅子に座って順番を待つ。ふと、自分の隣の少年を見ると獣人族のハーフなのか頭に犬の耳が付いていた。ハジメは村にも獣人族がいたので珍しいわけでもなかったが、他の子供は珍しいのかその少年をチラチラ見ていた。だが、その少年はそれすら気付かない程緊張していて、ずっと小声でブツブツ何かを言いながら手元を見つめて座っていた。恐らく詠唱を練習してるんだろうなとハジメは思った。

「次、ラニアン君。部屋に入って下さい。」

部屋から試験官が次の受験者を呼ぶ。だが、その声に誰も反応がない。

「ラニアン君、いませんか？」

ハジメはもしやと思い、隣の少年に声をかける。

「君、ラニアンじゃない？　呼ばれてるけど。」

「え？　・・・あ、ひゃい！！」

突然声をかけられた上に自分の出番が来た緊張で噛んでしまった少年は真っ赤になりながら部屋に早足で入っていった。それを見ていた子供達もドアが閉まった後クスクス笑っている。

「なんか悪い事しちゃったかな・・・。失敗しなきゃいいけど。」

少年が部屋から出てそのまま外に歩いて行った。顔を見たが脱力感は見えたがどうなのか分りかねた。そのあとすぐにハジメが呼ばれ部屋に入った。

「え～、ハジメ・アメジスト君でいいかな？」
「はい。」
試験官の質問に答える。試験官は書類を一通り見て質問を続ける。
「扱える属性はなんですか？」
「火と風です。」
「ほぉ、２属性使えるとは。それではまず火の方から見せてもらおうかな。攻撃系の場合は横にある的に向かって魔法を撃って貰えればいいからね。結界が張ってあるから力一杯やってもらって大丈夫です。」
「はい、分りました。」
ハジメは的に向かって詠唱を始める。『精霊魔法』（一般の人が使う魔法。ハジメは『魔人魔法』と区別するためこう呼んでいる）は一通り練習していたので詠唱は問題なくできた。前に出していた手に火の塊ができる。
「炎の矢！」
そう叫ぶと手にあった火の塊が的に向かって飛んで行った。着弾してボワッと炎を上げると的のあたりが黒く焦げた。
「うん、上出来だね。次は風魔法を見せて下さい。」
「はい。」
ハジメは詠唱を始める。するとハジメの足元を風が渦巻きだす。
「風の壁！」

そう叫ぶとハジメを包むように高さ２ｍ程の竜巻ができる。しばらくすると竜巻は消えた。

「素晴らしいね。問題も無さそうだ。では試験はこれで終わりなのでこのまま帰ってもらって大丈夫です。お疲れ様でした。」

「ありがとうございました。」

ハジメはお辞儀をして退室する。

学園の入り口で待っているとすぐにヒルナンが来る。それからしばらくするとエルレアも来て一緒に宿に戻る。宿に戻ると丁度昼食時だったので宿で待機していたラウと４人で食堂で昼食を取ることにした。食事が始まると早速話題は先程の試験の事になる。

「で、２人共どうだったよ？」

「ん？　オレは特に問題なさそうだな。」

「私も。」

「おお！　いいね。オレも問題なさそうだったしな。なんか驚いてたみたいだけど。」

「驚いてた？」

ハジメは首を傾げる。ヒルナンの試験は『騎士科』の上級生との模擬試合だった。軽く相手をするつもりだった上級生はヒルナンの気合の入った攻撃に驚いた。とても１０歳の子供とは思えない鋭い攻撃に油断してた上級生は危うく負けそうになった。すぐ気を取り直し負ける事はなかったが。その様子を試験官達は感嘆の表情を浮かべて見ていた。試合時間が過ぎ、ヒルナンは引き分けで終わった。大事なのは内容で試合結果が判断基準ではなかったが、他の受験生

は皆負けていたのでヒルナンは飛び抜けていた事が解かる。

「私も驚かれた。」

「エルレアも？」

エルレアは研究発表で自分の住む村周辺の動植物の生態研究結果を発表した。その中には森の動植物も入っており、国が森を危険地区としているので解明されていなかった事まで書かれた内容に試験官達が試験どころじゃなくなるという珍事が起きた。そしてなにより子供とは思えない調査の徹底ぶりに驚かされていた。エルレアの順番は最初の方で3人の中では一番早く終わるはずだったが、試験官達の質疑応答にすべて答えていたので他の受験生の4倍ほど時間が掛かってしまっていた。

「なんかオレが一番普通だったんだな。」

「ハジメが？　そんな訳ねぇよ。2属性使えるのって珍しいんだろ？　それでお前が落ちたら他の奴も皆落ちるだろ。他の奴がどんな奴かは知らないけど。」

2人に比べて普通の試験結果だったハジメはその事を口にするとヒルナンがフォローになってない事を言ってきた。本人はフォローのつもりなのだろう。「たしかにな。」とハジメが苦笑すると「だろ？」とヒルナンは満面の笑みを浮かべていた。

たしかにすべての人間が魔法を使えるわけではない。生まれ持った精霊との相性が影響するので魔法がちゃんと使えるのは5人に1人という割合だった。その中でも2属性を使えるのは極めて珍しいと前にオルタスから聞いていた。

３日目の朝、今まで以上に緊張した面持ちで３人は学園へ向かう。学園中央の広場にある大きな掲示板に合否の結果が張り出されていた。掲示板に貼られた紙には受験番号が並んでおり、その横に合否が書かれている。３人は緊張の面持ちで自分の番号を探す。

「よっしゃぁぁぁぁぁぁ！！！　合格だぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ヒルナンが歓喜の声を上げる。あまりの大声に周りの人も振り返り苦笑を浮かべていた。それに気付いたヒルナンは気まずそうに身を縮めていた。

「私も合格。」

エルレアは２人にだけ聞こえる声でそう言った。トーンはいつもと同じだが顔はとても嬉しそうだった。ちなみに２人は申込み時に奨学金制度を使いたいと学園側に伝えているので合格が決まった地点で奨学金制度も許可が下りたという事になっている。

ハジメも自分の番号を見つけて合否を見る。番号の横には合格と書かれていた。掲示板をざっと見渡すとほとんどの受験生が合格していた。学費が高い上に受験料もそれなりだったので「試しに受けてみよう」と軽く考えてる人がいないのと本当に篩いにかけるのは各科に進学する試験からだった。必要最低限の学力とスキルがあれば『初等科』はまず落ちないという事は王都に住んでいる者は知っていたが、３人がそれを知る事は無かった。ちなみにその事をラウは知っていたが、あえて口にはしなかった。

「うん、オレも合格だ。」

「３人とも無事合格だな！！　よし、ラウさんに伝えてこようぜ！！」

宿に引き返そうと走り出すヒルナンを慌てて止める2人。ヒルナンが「なんだ？」という顔をしているので呆れながらハジメは説明する。

「合格者は入学説明があるから講堂に集まれってさっきから案内の人が言ってるぞ？」

「あ、ホントだ。あぶねぇあぶねぇ。」

慌てて2人の元に戻るヒルナン。2人と共に講堂へと向かう。講堂にはイスが並んでおり、自分の受験番号が書かれたイスに各自座った。合格者が座り終わると係員が受験票を回収する。それと交換する形で合格通知書が配られる。

「これは入学時に必要になるから決して無くさないように。」

そう言いながら各自に配る。その後入学の日程などの説明を30分ほどして説明会は終わった。

すぐに宿に戻りラウに合格を伝える。ラウは笑顔で賛辞の言葉を送ると3人も喜んだ。その様子を見ていた女将も来て3人共合格だと知ると「今日晩御飯はサービスするよ。」と言ってくれた。夜から来た客も事情を女将から聞くと皆「おめでとう」と声を掛けて来てくれて食堂にいた客達が合格を祝った。その日の晩御飯はすごく楽しいものだった。

次の日、午前中は村にいる親や友人達への土産を買い、昼から王

都を出発する事になった。街を見て回りたかったが早く合格を伝えたいという気持ちが強かったので諦める事にした。土産を買い一度宿に戻る。荷物を纏め、女将にお礼を言って正門へ向かう。女将は玄関まで出て見送ってくれた。「入学したらまた顔出しなよ～。」と手を振ってくれたのでハジメ達も笑顔で手を振って応えた。

クロフレイアと合流して王都の外に出る。少し進んだところでラウが馬車を出してクロフレイアと繋げる。４人は馬車に乗り来た時と同じ道を通って村へ戻って行った。クロフレイアがペースを上げてくれたおかげで村には次の日の夕方には着く事ができた。

「たっだいまー！」

ヒルナンの声に村の皆が集まってくる。オルタスも丁度村にいて馬車の方へ来る。

「やあ、その明るさから察して試験はうまくいったのかな？」

「おう！　３人共無事合格だぜ！！」

ヒルナンの答えに歓喜の声が上がる。それに３人共照れた顔をする。子供達が３人の所に駆けつけワイワイと話しているとオルタスが大きな声で村人に話しかける。

「よし、それじゃ今日は３人のお祝いをしよう！！　広場でパーティって事でいいなかな？」

オルタスの提案に村人達は盛り上がる。すぐにパーティの準備が始まり、女性陣は料理を作る。男性陣はテーブルや酒樽などの用意や、狩っていた獲物を捌いたり力仕事をしていた。ハジメ達３人はそれぞれ一旦家に帰ったが、パーティの準備の間子供達はする事がないので道場の方で集まり、お喋りをしながら時間を潰していた。

そして日も暮れて準備も終わり、皆広場に集まった。

「さ、みんな集まったようだし乾杯しようか。それじゃ！　３人の試験合格を祝って！　乾杯！！」

「「「「「乾杯っ！！」」」」」

それを皮切りにパーティは大いに盛り上がった。パーティは夜中まで続いて、子供達が寝てしまった後も大人達はしばらく広場で盛り上がっていた。

入学日までの村での生活はあっという間に過ぎ、村を出発する日の前日となった。その日の夜。

「よし、これでいいかな。」

ハジメは自室で荷物を纏めていた。学園に入学すれば寮生活が待っている。衣類や日用品を纏め鞄に詰め込んでいるとオルタスとクラウが部屋に入ってきた。

「ハジメ、ちょっといいかい？。」

「はい、何でしょう父上、母上。」

オルタスはニコリと笑い、手にしていた物を渡す。直径１ｃｍ程の黒い石のついたネックレスだった。

「これは？」

「魔晶石だよ。ハジメにプレゼントしようと前々から探してたんだ

けどなかなか手に入らなくてね。昨日やっと森で見つけた
んだ。いやぁ、ハジメが出発する前に用意出来てよかったよ。」
「これが・・・。」

ハジメは渡された石をじっと見る。核人の本体であり命の源の魔晶石をハジメは初めて見た。見た目は黒い結晶で特に珍しそうな感じはしなかった。

「これも生き物になるのですか？」
「いや、その石はまだ眠っているようでね。目覚めてから魔力を吸い出して自我が芽生える。そしてさらに魔力を貯めて生き物の姿になるって感じかな。いつ目覚めるかわからないからハジメはいつも身に着けているだけでいいよ。自我が芽生えだしたらハジメにもすぐわかると思うから。ラウとか人型になる程の魔晶石は持ち主との相性って問題点があるけど、それくらいの石ならまず問題ないだろうしね。」
「わかりました。ありがとうございます。父上、母上。」」

オルタスの説明を受け、ハジメはまた石を見つめた。見つめているとクラウが前に来てハジメと目線を合わせる為にしゃがむ。ハジメの目をじっと見つめ、ハジメに話しかける。

「学園に行ったら寂しくなるかもしれないけど、ハジメは強い子だからきっと大丈夫。頑張ってね。」

そう言うとハジメをギュッと抱きしめる。オルタスもハジメの頭を優しく撫でる。最初は恥ずかしくて硬直していたが、２人の優しさに包まれてハジメもクラウに抱きついていた。

出発の日、村の入り口には見送る為に村人全員が集まっていた。今回もラウが付き添いでクロフレイアが引く馬車で行く事になっていた。

「それじゃハジメ、ヒルナン、エルレア。がんばれよ。」
「体に気を付けてね。たまには帰ってきなよ。」
「頑張ってね3人共。兄さん、遊んでばっかいちゃだめだよ。」
「だ、大丈夫だって！　何しに行くと思ってんだ！」

レットン、トナイ、ヒルダの3人がそれぞれハジメ達を応援する。ヒルダはヒルナンの心配の方が多かったが。

「元気でやれよお前等。向こうでも訓練はやるんだぞ！」
「大丈夫だって師匠！　さらに腕を磨いてあっと驚かせてやるぜ！」
「おう、楽しみにしてるぞ！！」

ドルガンの激励にヒルナンが返しガシッと握手をする。ハジメとエルレアもその後に続いて握手をした。その後3人それぞれ家族とお別れをして馬車に乗った。

「それじゃ！　3人共頑張ってきなよ！！」
「はい！　行ってきます！！」
「行ってくるぜ！！」
「行ってきます。」

オルタスの言葉に馬車から身を乗り出して返事をする。村人が手を振るのに笑顔で手を振り返しながら王都へ出発して行った。

第１０話　国立バスティア学園初等部入学試験（後書き）

新章突入です。
いきなり結構駆け足気味で入学まで行っちゃった気がしないでもないです。
次から学園生活スタートです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5166z/

ジュエル！

2012年1月4日01時48分発行